
続きは、社長室で。【1】

沙璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続きは、社長室で。【1】

【Nコード】

N4878T

【作者名】

沙璃

【あらすじ】

閉ざされた社長室の一室。誰より愛おしい貴方の命令を受けて、今日もその扉を開く私。

『俺の秘書をしてくれ』——そう貴方の発した一言が。

幼馴染みだった私たちの関係をイビツに変えてしまったアノ日から…。

大企業の社長と秘書の切なくも甘い、社長室での密事とは…？

※別サイトにある、同作の加筆修正版を掲載しております。

往來の、始まり。 1 (前書き)

あなたをただ愛しているからこそ、何も言わナイ。

ずっとずっと愛してきたからこそ、何も言えナイ。

私のキモチはいつたい、どちらが起因しているのだろうか――

往來の、始まり。 1

カーテンからの薄日が漏れる頃合いに、今日もまた同じ時刻に目覚ましのベルがけたたましく鳴り響いた。

「う…、ん・・・」

未だ覚めやらぬ重い瞼をムリヤリ開きながら、手を伸ばして惰性で目覚まし時計の騒音を止めた。

朝晩の寒暖差の激しい春の時候は、低血圧で寝起きも悪い私には堪らないもの。身を沈めているベッドから抜け出るのも億劫に感じるけれど。

どれほど眠っても疲労の取れない身体を起こし、ベッドを抜け出してカーテンをシャツと勢い良く開いた。

「うーん…、いいお天気」

今日という新たな始まりを告げるように昇り始めた朝日が、そんな思いと眠気を取り払ってくれるようだ。ストレッチ代わりに両腕をうーんと伸ばせば、のんびり出来るのも此処までとなる。

「あっ、急がなきゃ！」

そこでようやく時間の無さに気づき、あとで泣くコトとなるのは自分自身だから――：

“どうしよう”などと独り言を発しながらも、絶対に此処で手を抜く訳にはいかない。ムリに足掻きを見せては、完璧なスタイルを目指して作り上げようとするのも日常である。

きっちりとカールアップさせた、ロングタイプのマスカラを塗った睫毛。表面の凸凹をカバーさせた、フラットでいて艶やかなお肌。顔色アップには欠かせない、パール入りのピンク系のチークとほんのり赤みの差したリップ。ヘアスタイルはサイドを残してのフルアップでも、あくまでナチュラルに。

どれほど焦っているようにとも、身支度だけではどのプロセスでも気を抜くコトが出来ないのだ。

これが私が課せられている、とても密かな定めゴト。何も取り得のナイ私が、唯一必要とされている部分となれば当然だもの…。

「まったく蘭ってば…、もうすぐ時間じゃない！」

階下に降りて行けば今日もまたチラチラ時計を一瞥しながら、何度となく私を催促する母に苦笑する。

「もー…、大丈夫よ」

何処か叱咤にも似たその声色を宥めたあと、イライラに効くらしいカルシウム補給の牛乳を一気に飲み干した。

「それじゃあ、行って来ます」

「気をつけてね。くれぐれも…」

「はい！」

傍らにスタンバイさせておいた大切なお仕事バックを掴めば、まだ時計を見やる母に見送られて急いで玄関を飛び出す。

お母さんに、また今日も言われたな…。内心で小さなイライラを感じつつも、表面では小さな溜め息を吐き出して、それらをすべて諦めていた。

朝からばたばた忙しく騒がしい私は、佐々木 蘭^{ササキラン}。大学を卒業したばかりの23歳でいて、とある企業で秘書をするしがないOLである。

今も昔も心配性すぎる母に対して、ウンザリする部分がナイと言えば嘘になるけれど。それらを聞き流してしまうのは、母の言う意味を理解して悟っているせいだ。

たとえば先ほどのように、毎朝の見送りで言われる“気をつけて”の言葉。これは決して、一人娘である私に掛ける心配の言葉だけではない。

だけれど仕方がないもの…。これは代々受け継がれてきた、佐々木家の“ある”姿勢のせいだ――

それを小さく厭いながらも、自分なりに必死で完璧なスタイルに近づこうと努力しているのだから、もはや滑稽で泣きたくもなる。

すっかり履き慣れて来たハイヒールでコツコツ音を鳴らしながら、今日も私はひとりある所へと向かうの…。

往來の、始まり。1（後書き）

ご覧下さいまして本当にありがとうございます。

本作はHPにて別名義（☆さりさり☆）で完結済みの作品でございます。

ゆるゆる手直しをしながら再度、彼女たちを大人仕様で更新していきますのでお願いいたします。

往來の、始まり。 2

そうして向かう先とは、自宅から徒歩で僅か30歩以内で玄関へ到着してしまう。いわゆる、お隣さんと呼べるほどに隣接したお宅である。

ここは巷で高級住宅街とされる地ながら、そこに居を構える私の家といえばまずまずの中流家庭。ありがたいことにお金には困る事なく育てられた。しかしながら、本来であればこの地に住めるほど裕福ではナイと思われる。

対して比べるのもおこがましいほど、お隣の立派すぎる邸宅は、誰もが目を見張るほど豪華絢爛なのだ……

広大な敷地を守るようにして重厚で頑丈な鉄柵が四方を囲んでおり、エントランスまでは徒歩で約5分を要するほど。まさに優雅という言葉が相応しい庭園には、季節に応じた花が咲き誇っている。そのため隣に建つ私の家など、まるで猫の額に思うほど貧相に見えてしまうのだ。

どうしてチガイを見せつけられるような、お隣同士なのだろう…？ もしもこれ程近くにいないければ、きつと楽でいられるハズで。自分から近づけない間柄であれば、きつと心穏やかだと思えてならないの。

暖かな陽気に水を差すように、ひとつ溜め息を吐き出してその言葉

を呑みこんだ。それから玄関のチャイムを鳴らすのは日々の日課である。

「はい？」

すると息つく間も与えられず、素早い応対をされるものだからこちらの気も一層引き締まるのも常だ。

「蘭です、おはようございます。あの、社長は…」

丁寧に一礼をしたのちインターフォンへと問い掛けたものの、どうしても遠慮がちな声色しか出ない私。

「蘭ちゃん、おはよう！」

ごめんなさい、拓海はもうすぐ行きますからね」

柔らかな声色を響かせる通話の主は、このお屋敷に住まわれる奥様。声の綺麗さはもちろんのコト、とても美しい方のうえ物腰も柔らかい。

こんな覚束ない私でさえも丁寧に扱ってくれる彼女は、代名詞など決して見つけられナイほど素敵な女性だ。

「はい、かしこまりました。奥様、ありがとうございます」

誰もが憧れを抱く彼女との会話を通例どおり終えた刹那、今日もまた閉ざされた扉は自動でゆっくり開く。

その先に広がる敷地内へと足を踏み入れれば、春爛漫な気候を象徴するように色とりどりのチューリップが咲き誇る中を静かに進む。ずっと晴れることのナイ私の心模様も、どこか明るくなれるのは気のせいではナイだろう……

「蘭ちゃん、ごめんなさいね」

見飽きることのない花々を眺めながら玄関に辿り着けば、今日も奥様は控え目に手を振りながら出迎えてくれた。

「奥様、おはようございます」

「もう、そんなに畏まらないでいいのよ。
今日も大変だと思うけれど、どうぞ宜しくね」

それに平身低頭で挨拶をしたものの、必死でキヨリを置こうと足掻いているコトなどお見通しのようなのだ。

「はい、かしこまりました」

やんわりと窘められれば微笑みに悲しさを覚えるけれど、この優しさは断として受け入れてはならない。

昔から朗らかな奥様のコトが大好きで、心から尊敬しているのは紛れもない事実でも。自らに破れない殻を纏ってしまった今の私は、もう形式的な会話しか出来なくて。

そのキツカケを作ったのも、こうして埋められない隔たりを感じるのも、すべて社長のせいになりたい…。

「そうそう蘭ちゃんは、薔薇なら何色が好き？」

少し物思いに耽っていたところ、不意に花について尋ねられてしまった。これを聞かれる時はお花好きの奥様が、次回の庭園のイメージを考案中の印である。専属の庭師さんや造園師さんたちがいてもなお、広大な庭園のお世話を欠かさない彼女らしい。

「ええと…、私は真っ赤な薔薇が好きです」

思案ののちに紡ぎ出したのは、あまりにありきたりな色であった。花の名前でありながら、さほどお花に詳しくナイ私の答えに母が居れば嘆くことだろう。

「あら嬉しい、私もなのよ！そうねえ、次のコンセプトは…」

それでもニコリと嬉しそうに、嫌味などゼロの表情で頷き返してくれた彼女。広大すぎる敷地を眺めながら配置を考える奥様は、まさに女神そのものに思えたの。

ゆったり流れる彼女との他愛も無い会話に、花が咲きかけたまさにそのトキ。すぐ後方で玄関のドアがガチャリと音を立てて開いた。

「蘭、行くぞ——」

「っ、はい……」

この声色が届けばもう、一気に現実へと引き戻されるから上手く笑えなくなる。本来の目的へと誘うような、愛おしい人の指示には従うだけだもの……。

往來の、始まり。 3

訪れた沈黙を切り裂くようにコツコツと革靴音を鳴らし、今日もまた私の前に颯爽と現れたのはクールな面持ちの社長である。

すなわち私が働く企業のトップに君臨する人物であり、遠い昔にただの幼馴染みであったヒトでもあるけれど。

「…蘭、」

一定音の靴音がぴたり鳴り止んだ刹那、静かにキョリを縮めて立ち止まると、訝しげな表情はそのままに落ち着いた声色で呼ばれた私。

「あ…、はい」

それが懐かしさを奪い去ってしまうから。どうしても私は動揺して、たどたどしい生返事をしてしまう。

ただ社長から、名前を呼ばただけだとしても。自制心を掛けねばならない、この胸の奥の高鳴りが自身をまた苦しめる。それでも分かっている、コレは許されざる感情なのだ…。

「…挨拶が遅れまして失礼いたしました。

社長、おはようございます。今日も宜しくお願いいたします」

またすべてに鍵を掛けて、何もかもを誤魔化すようにニコリと笑ってしまえば、あとは平静を装って平身低頭で挨拶するのみ。

「ああ、行くぞー」

「はい・・・」

此処で何も感じられない冷たい声色と色をなさない眼差しとともに、ズシリと重いビジネスバッグを差し向けられたとしても。決して辛いワケではない。今日もまた、一日が始まるサインとして捉えるのが正しいのよ。

受け取った重いバッグを落とさないようにと、持つ手には自然と力がこもってしまうけれど。未だ膨らんで止まらないキモチも、同時に握り潰せたらどれほど良いだろう。だけれど、これならば大丈夫ね。今日もビジネスだと笑えると思う。

そうして密かに自身を宥めていれば、何処までもクールな社長はスタスタと軽快な足取りでガレージへひとり向かって行く。まさに朝の忙しい最中というのに、いつでも逞しさ漂うその後姿を見つめてしまう私。

手を伸ばすほどに届かないと分かっている、広いその背中を悲しくも視線が追いかけているのだ。昔ならば…と、過去を省みてしまう愚かさに泣きたくなる瞬間だ。

すると幾許かして、小気味良い靴音がある地点でピタリと止まった。それと同時に、クルリと振り返った社長が此方をジッと見据えて来る。

「早く行くぞ」

「申し訳ございません…」

途中で立ち止まれば何時でも、時間の無駄と言いたげに急かす一声を掛けてくれるけれど。それに謝罪しか返せないものの、萎れかけていた心がまた熱を帯びてしまう。

ただアノ頃と変わらぬ、優しい色のブラウンの瞳に真っ直ぐ捉えられただけ。先ほど以上にドキリと高ぶる鼓動音に、見え透いたウソをついてしまえば。燻ぶりかけた感情を胸に納めて、同調するようにカツカツとヒール音を鳴らして歩み始めた私。

こうして変わらない一日の始まりは、愛しいと言ってはナラナイ彼の背中を追いかけて行くの…。

思慕の、始まり。 1

惹きつけられてあとを追えば、社長がいつも気分で選ぶ車の助手席へ乗り込み、彼と共に会社へと向かうことになる。

今日ズラリと並ぶ中から選び出された車は、社長のお気に入りと思しき真っ赤なフェラーリ。

と言っても、それは愛用車のひとつに過ぎず。家一軒が易々と収まる広さのガレージ内には、何台もの高級車がその出番を待ち構えている。

運転席へと彼が落ち着きエンジンを始動させれば、今日も滑らかかつ颯爽として車は走り出した。

車に拘りのある社長は当然のように運転にも煩く、本来は欠かせぬ専属運転手を断ってまで自ら運転しているのだ。

こうして日々同乗させて貰える理由など、ただひとつしかない。私がお隣さんであり、しがなくも秘書の位置づけであるから…。

高級スポーツカーらしい独特で軽快なエンジン音を響かせ、その性能を生かした走行をみせてくれるけれど。今日もまた車内では変わり映えなく、会話のナイ静かな時間が流れゆく。

その沈黙の中、気づかれないように運転する社長の横顔を一瞥してしまう。

思わず見惚れるほどのシャープな顎のラインと薄めの唇は、何処か色っぽさを醸し出しており。鋭い眼光を放ちつつ正面を見据える、優しげなブラウンの瞳はソレらを引き立たせる仕上げとなる。

とても精悍な面持ちの彼であるけれど、加えてこの巧みなハンドルの捌きを目の当たりにすれば。きっと大抵の女性はイチコロとなるだろう。

それだけでなくとも他を寄せつけないほどに、異彩を放つ社長は格好良すぎるのだから――

お隣さんを此処まで褒めてしまうのは、如何なモノかと思われるのも常だけれど。彼の場合はどうしても、賛辞しか思い浮かばないヒトだから致し方ナイこと。

その彼の名前は、東条 トウジヨウタクミ 拓海。私より2歳年上であり、若干25歳ながら既に大企業を治めている社長である。

彼は同年代の男性と比較すれば、随分と落ち着きを払った性格をしていると思う。言ってしまうえばクールだけれど、密かに優しい一面も持ち合わせている不思議なヒト。

綺麗な顔立ちを引き立てる、サラッと靡く漆黒の艶々な髪に、優しげなダークブラウンの瞳の色が印象的。さらに高身長ながら細身であり、筋肉も備えたしなやかな体躯をしている。

これらすべてを持ち合わせれば、誰もが振り返る容姿の完成となるのだ――

ちなみに社長を務める東条グループの会長が父であり、彼の母親は国内で有名な元トップ女優だった。

彼には兄弟はなく、いわゆる一人っ子。アメリカのハーバード大学を優秀な成績で卒業後、MBAを取得して日本へと帰国。それから東条グループ社長として会社を治め、はや現在に至っている。

口にすればするほど非の打ち所がなくて。密かに造形美とまで称されるほど、“完璧”を絵に描いた人物なのだ。その浮世離れしている逸材と等しき彼の秘書を、しがない私が務めていることになる。このキツカケはすべて、彼が齎したモノとは恥ずかしくて言えない――

自嘲気味にチラリ視線を落としたものの、もはや恒例である本日のスタイルを目が自然とチェックし始めた。

肌色を際立たせる、シックなネイビーのストライプスーツ。ライトブルーの爽やかなネクタイを合わせて、華やかさも忘れないところが最大のポイント。

この瞬間…そう今だけだから、と自身に実りのナイ言い訳をしては、運転中である彼を密かに見つめてしまうの。社長を注視しても許される、ごく僅かなトキだから…。

「蘭、今日の予定は？」

ツキンと痛みを覚えた刹那、変わらず真っ直ぐ見据えている社長か

ら尋ねられてしまった。

「あ…、は、はい。本日は13時より、TS商事の後藤社長様とご会食が入っております」

少しばかり声が震えながらも、この瞬間を待ち構えていたのは事実。すでに手中にスタンバイさせていた手帳をパラパラ捲り、確認のため事細かにスケジュールを伝えていく。

しっかりしなきゃダメね——社長からの言葉ひとつで自制心を易く失いかける、不器用な自身を嘆きたい日々は戸惑いの連続。どうしてか未だに“蘭”と呼ぶ社長に反応し、心はギュッと締めつけられるように苦しさが募る。

こうして何時までも、幼い頃の儚い想いを抱きながら会社へと向かうしかない——

思慕の、始まり。 2

今日もまた順調な走りを見せた真っ赤なフェラーリは滑り込むように、東条グループ本社の自社ビルへエンジン音を響かせて到着した。

ビルのエントランス手前にそれを近づけて停止すれば、独特な轟音はピタリと鳴り止んでしまう。このエンジンの停止音は同時に、密室空間でのトキの終わりを告げるのだ。

ガチャリとドアを開けて車外へ出た社長に続いて、私も静かにスポーツカー独特の狭い空間から抜け出した。晴天の青空とともに視界に映った自社ビルを、そのまま仰ぐように無言で見上げてしまう。

国内外に名を轟かせる有名建築士設計の自社ビルは、近代のかつ上品さを兼ね備えた造りをしている。印象的であり品格がある、と社内外問わずに好評を博す優美さなのだ。

これこそが社長就任を計って新築された、名高い東条グループの本社。“拓海キャッスル”と、皮肉交じりに揶揄されても仕方がナイだろう。

「蘭、行くぞ——」

いつまでも佇んで動こうとしない私に対し訝しげな表情で、少し離れたトコロから待ち構えていた社長。

「申し訳ございません…」

現実に戻されて一礼をしたのち、小刻みにヒール音を鳴らして彼の要求通りにキョリを縮める私。

だけれど決して重ならぬ視線から伝わるモノは、待っている訳ではないコト。ただ私に預けた、大事なビジネスバッグ案じているだけなのだ。

そうして私は必ず、一定のキョリを保ちながら歩を進めて行くのを忘れない。背が高い彼のコンパスはやはり大きく、闊歩する後ろ姿には颯爽という言葉がピタリと填まる。

しかしながら、後ろをつく私の足はハイヒールが枷となり、やたらと不器用な音が生まれていて。何処までも交わらない靴音が、ただ虚しさを助長させるから悲しいものだ。

そう嘆きながらも、本当は気づいているの。私の前に行く貴方は、密かにスピードを緩めてくれていると…。だけれど、このキョリを縮める勇気のナイ私に追いつくだけの勇気は皆無だった。

もう二度と…、貴方の隣を歩くコトは叶わないと分かっているから。そう、ただの幼馴染みから、貴方の秘書となったあの日を境にして

――

どれほど前に戻りたいと願おうとも、二度と叶わぬアノ頃に抱いた儚いキモチ。いま自身で選んだ道を辿っているというのに、なぜ私は苦しいと思うのだろうか？

前方に行く彼の広い背中を一瞥すれば、抗う分だけ心にウソをつけ

ないと知らされることもまた辛い。

だからこそ煮え切らぬ自身を叱咤したくて、カバンを持つ手にキュッと力を込めるのが何時しかクセになっていた。

日々のすべてが離れゆくキヨリを物語り、どうにもならないと位置で生きていると暗示されていて消えないの。どうすれば…、いつになれば貴方を忘れられるの？ふと泣きたくなるほど弱い自身の想いに、今まで何度尋ねて来たのだろうか。

『大学卒業後は俺の秘書をしてくれ』

社長と秘書という虚しいカンケイの、すべての始まりはあまりに突然の一言からだったの。

それは大学3年生に入って本格的に就活を始めようとした矢先、幼馴染みの彼から齎された言葉であり。当時アメリカより久しぶりに入った電話から、すでにイビツな関係が形成されていたね…。

思慕の、始まり。 3

“俺の秘書”——その当時、職種を絞り始めていた大学生の頃の私には、まさに青天の霹靂であって鮮烈な言葉だった。

何においても一般に埋もれる取り柄のナイ私が、世界的企業の秘書と結びつけるコト自体おがましい。

「え？ひ、秘書って…私がその、拓海の…？」

“国際電話だから上手く聞き取れなかった”と変な言い訳を重ねて、慎重に尋ねたのも仕方がなかった。

「そうだよ。はじめから働く時は、蘭を秘書に据えるつもりだったんだ。ほら、俺たちはちょうど就職時期も重なるからね」

「っ・・・」

さも当然と言わんばかりに、優しく響く清涼な声色でサラリと返されるから、とても返す言葉が出て来る訳もなくて。

「それで、どう思った？」

「で、でも、私…」

「蘭？」

昔から変わらないのは、落ち着いた声音で名前を呼んでくれること。それだけのことで、バクバクと鼓動が加速して煩くなってしまう私。

電波を介したハンディなどもとせず、清涼感ある彼の声を久々に聞いたこのトキも心が攫われていたの。

「やっぱり…、俺には報告ナシなの？」

暫しの沈黙が流れたのちに投げ掛けられた疑問符は、彼には至極珍しい溜め息と言葉少ない不満が届いた。

拓海への報告をしていない？その言葉足らずの問い掛けを理解出来るハズもなく、受話器を片手に問い掛けの意味を探ろうと首を傾げれば。

「秘書検、受けてただろう？」

すこぶる頭の回転の速い彼らしく、分かっているないと察して答えをすぐに差し向けてくれたのだけれど。

「え…、どうして拓海が知ってるの？」

その発言により動揺などすっかり葬った私は、感じたままに率直な

疑問をポツリと紡ぎだしてしまった。

「どうして俺には言わなかったんだ？」

「そ、そんな…」

「俺には電話で“おめでとう”の一言も、言わせてくれないのか」

「ッ……」

少しだけ拗ねたような声色で重ねられた言葉は、嬉しさのあまり鼓動が高ぶってしまうから、頬が熱くなるのを感じずにはいられない。

それがせめて伝わらないように、ひとつ息を呑んだものの。どうして拓海が知っていたの？と、脳内で“知られた”原因を探ることに終始すれば。

容易に辿り着いたひとつの線は、母が奥様に何気なく告げたものが海を越えて拓海へ伝わったのだろうと――

「そんな…、大したコトないんだよ？」

事務職に就くには持っている方が有利だと思って、母の勧めもあって軽い気持ちで取っただけなの」

言わないでいいのに、と陽気な母に対して溜め息をつく。何より取り繕いをすれば、それはあまりに陳腐な戯れ言となっていた。

その当時の私は就職の際に、職種よりもデスクワークを望んでいた

ことから。秘書検を取っておけば、その後何らかの形で有利になると考えたのだ。秘書検定2級はソレなりの勉強次第で、誰にでも取得可能である資格のひとつ。

日本を飛び越えた言語の違う国で、スキップによりMBAを取得してしまった拓海に、態々連絡して伝えるようなモノでナイことは明白だったのだ。

そんな彼には、成績優秀という賛辞さえ相応しくないと思う。敢えて名づけるのならば、“神童”というフレーズが填まるほど秀でた人である。

「そんなことないよ。合格は蘭が努力したからだろう？——よく頑張ったね、おめでとう。」

それに、お袋が知っていて俺が知らない事が出来たのも残念だな……」

「……っ」

やんわり諭されたものの、それはご褒美としか思えなくて。イタズラめいた声色は優しすぎるから、複雑な想いに息を呑んでしまう。

せっかく彼へのキモチを抑えていたのに……、アメリカへと会いに行きたくて堪らなくなった。だけれど分かっていたから——決して実らぬ気持ち握りしめようと、ギュッと手に力を入れた。

「そういう訳で、蘭の就職先は既に決定しているからね。俺が帰国したら宜しく——分かった、秘書さん？」

「え、でも・・・」

「それじゃあ——」

寂しいと口に出来ずにいれば、矢継ぎ早に締め括られて途切れてしまった通話。会話終了を告げる、アノ虚しい無機質な機械音は今もふと思い出すほど鮮明だ。

本心ではずっと断りたかったけれど…、幼馴染み以前に私の置かれた立場で拒否権など用意されていなかったの。

誰よりも愛おしい社長が決めたコトに、生まれた時から一切抗えナイ間柄だから——

秘書の、始まり。 1

すべては私が名乗る“佐々木”姓と、由緒正しき名家である“東条”家が存在するせいになりたい。

いささか不満に思うのはすべて、私の中で燻ぶるキモチが原因であることは分かっているのだ…。

彼が無表情で社屋内へと足を踏み入れれば、ソレだけで空気がピタリと止まったかのように、辺りは静まり返ってしまった。

これもまた社長が持つ名前に加えて、絶対的な存在感とオーラゆえなのだろう。

「おはようございます」

「おはようございます、社長」

「おはようございます」

それに構うことなく、一定の革靴音を立ててロビーを闊歩していく社長はすれ違う人々に対し、すべてにこやかに挨拶を重ねて行く。

不思議なことに彼の挨拶には、打算や情性は一切感じられナイ。寧ろキツチリ応えて返すその態度に、彼の丁寧さと優しさが伝わって

くる。これこそが誰に対しても平等であり、分け隔てのなさゆえにヒトを惹きつけるポイントなのだろう。

嫌味に思ふ隙も与えられないほど、すべてを兼ね備えた社長の最大の武器だと…。

あまりに人間味も大きい彼の後ろに静かにつき、ひらすらに俯き加減で歩き続けて行くのは私の日課だ。

今日もまた安息の地は用意されナイ息苦しい日と、心の中で覚悟を決めているから共に居られるの。

すでに此処から始まりを告げる、様々な苦境を受け入れるにはまだ幼すぎるけれど行くしかない…。

一目見た者を惹きつける抜群の容姿に付随し、類稀なる能力と圧倒的な存在感を持つ社長。

確かに社長職に就任して日は未だ浅いのだけれど、既に誰にも侵すコトの出来ナイ確たる地位を築き上げている。

永代続く、東条家の跡継ぎという重圧など見事に撥ね退け、今日もまた羨望と尊敬の眼差しが一身に注がれているのだ。——同様にして、ヒソヒソと小さく話す声が私の耳に届いて来た。

とかく完璧すぎる彼の後ろを頼りなげに俯き加減で歩く、あまりに平凡すぎる私への馬事罵倒が…。

“ ホント、新人のクセにイイご身分！ ”

“ 何様だと思ってるの？ ”

“ ていうか、何であの子が社長秘書な訳？ ”

“ ああ、それは…… ”

“ 召し使いだからよ—— ”

「……」

どうにか聞こえぬフリをしていたけれど…、どうしても最後の言葉には今日も心に鋭い痛みを覚えた。

すり込みされるほど、日々同じ言葉を聞かされていても。心はそのフレーズを拒否したい、と自身へ鈍い痛みを与えて受け入れない。こうして正当的な周囲の言葉で露呈するのは、何処までも弱くて情けない自分だね…。

“ あの子は召し使い ”

あまりに辛辣で残酷すぎる言葉であるけれど…、もちろんソレは自身が一番解っているのよ。

こうして陰口を叩かれたりしなくても、重々承知しているのだから本当は言わないで欲しいの。

昔は幼馴染みで、それが消え失せた今は社長秘書——まさに“ コマ ” 同然の存在であり、生まれた時から彼の手中に収められている。自身の立場と身の程をこれでも弁えているから、これを幸せだと思

ってもいるのよ？

もし普通に生活していたとすれば…、神童と等しい貴方の後ろを歩くコトなど絶対に叶わないから。つかず離れずの一定間隔のキヨリを必ず保ち、今日もまた無言のままに彼の背中を追うことに終始するの。

自ずと近づくコトはもう許されナイ…、ただの“契約”で繋がれている立場ではもう――

秘書の、始まり。 2

これを契約と表現することも、おこがましいのかもしれない。とにかく社長にとっては私など、どうでも良い位置づけなのだから…。

自身を戒しめるほど虚しさは増幅して、悲しみに比例して心はズキズキ痛みを覚える。どのみち今後、日の射す未来など当然のように用意されていない。

こうして諦めの境地で気を保ち続けられるのは、はかなくも“契約”のお陰であった。こうして自重を浮かべるごとに思うのは、いつ切り捨てられるのだろうか…。

日々の苦しみ以上に増してゆくのは、どこにも行き場のナイ不安と届かない強いキモチだけだった。

『佐々木の娘だろうか？』

アノ日に吐き捨てられた言葉は忘れることなく、事あるごとに頭の中でグルグルと駆け巡って孤独を誘う。

うろたえる私を嘲笑するように向けられた瞳は、まさに鋭い刃で私の心を抉るほどの威力があつて。その刹那、2人の間に存在した”

何か”が、あっけなくプツンと途絶える音が聞こえたの。

彼の人となり、小さな頃から知っていたから。ずっとずっと拓海だけは、周りの人とは違うと固く信じていた。いつか…、一生のうちに一度で良いから。

貴方がことが誰より好きだと、振られることを覚悟して伝えさせて欲しかったけれど。

そんな願いを籠めて、想いを温めていた私はバカだったね…？

2人の間にある、隔たりなど貴方は気にしてイナイと純粹に信じ込んでいた私。ずっと拓海だけを想い続け、ひたすら貴方の帰りを待ち続けていた。

その中で着々と逃れられナイ状況へ追い込まれて、挙句の果てに“佐々木”の名前を引き合いに出された時に初めて気づいたの。

いつでも変わらずに隣に居てくれた貴方も結局、周りと一緒に内心で蔑んでいた立派な証拠だと――

アノ日受けた洗礼を拭えぬまま私は、まるでトキがストップしたような毎日を過ごしている。きっとこれもまた不器用な自身を守る為に自ら引いた、頼りナイ防御線なのだろう…。

もしハッキリと“嫌い”だと振ってくれたのなら、少しは心持がチガウでしょう？これほど貴方を見る度に、切なさや息苦しさは覚えられないでしょう？

終わりのナイ自問自答を繰り返せば、呆れるほどに心がまた痛くな

る。どうすれば今後、実りなきキモチは消え去ってくれるの？…な
どと思いつながら、貴方と離れナイ限り、この想いが絶対に消えナイ
ことなど解っている。

社長と私との間に作られている、あまりにイビツな関係が続く限り
はずっと…。

このままで良いのかと迷いつつ、どうにも出来ずに抱えて今日に至
っている。今後も私はこのまま、失恋と絶望を同時に齎したヒトに
仕えなければならぬ。貴方からイラナイと言われる、その終わりが
来る日までは――

裏切られたというキモチが強い分、貴方をキライになれば良いの
に。自身の感情にも白旗を上げた私は、虚しい日々へのスパイラル
へ陥っている。

社長と取り交わした、あまりに息苦しい“契約”こそが、無力な私
へ更なる追い打ちをかけた要因でもあり。未だに表現することさえ
難しく思うほど、当時の頭の中はもう真っ白になっていた。

きつとアノ時に取り巻いたモノこそ、虚無感と呼ぶべきなのだろう。
私なんかが身の程知らずに、二度と希望など持ってはダメと――

だからこそ、紛いなりにずっと抱いてきた想いは、その日を境とし
て一切を封印すると決めたの。

開けてはならぬパンドラの箱に想いを詰めて、頑丈な鍵を掛けたあ
とはその留め金が外れないように。大好きだった社長だけでなく、
すべてのものに感情を表に出さないことにした…。

秘書の、始まり。 3

罵詈雑言を潜り抜けたのちに待つのは第2の密室空間となる、エレベーターという名の箱型でのトキ。

静まり返ったソレの中では息苦しさを覚えるけれど、一切の感情を表に出さず上昇途上のヒトトキをやり過ごすことが常だ。機械的な到着音とともに、最新鋭の高速エレベーターは滑らかに動力停止する。

目的地となる最上階でその扉がスツと開いた途端、すぐさま闊歩して行く彼の後ろを一定のキヨリを保ちつつフロアへ出る私。

最上階に位置する此処は、会長室やいま目指している社長室をはじめとして。専務室、常務室と続く、いわゆる重要ポストである役員が集う部屋の集合体である。

とかく広々としていて、圧倒されるほどの開放的な造りがこのフロアのコンセプトだと聞いている。

それには甚く納得しているものの、その分はなおさら担当する社長室が異質に思えてならない。

各々の役名を記すプレートを一瞥しながらフロアを突き進んで行けば、その最奥に位置する“社長室”へと到着した。

「どうぞ」

「――ああ」

出社前より預かっていた、大切なビジネスバッグを授受する――毎朝恒例であるこれは、彼の温かみなど微塵も感じられないやり取りだ。

それに傷ついていながらも私は、何気ないモノにさえ自制を強いている自身に嫌気がさすの。

授受の際に少しだけ触れる、骨ばったしなやかな指先の感触だとか。近づいたことで、ふわりと鼻腔を掠めるホワイトムスクの甘く爽やかな香りだとか、言えばキリの無いほどに。

これらはすべて平常心を保とうとしている私の感情を、一瞬で容易く囚えて揺さぶるから苦しくなるだけ。

そう、本当は前から分かっているのよ。いくら心で頑丈な鍵を心に掛けても、開錠されてしまうと――

ドキンと甘く高鳴りを告げるだけ、虚しい鼓動が響いて。チクンと疼きを覚えれば、ソレ以上に切なさの募る鼓動が鳴り響くから。この相反する感情に苛まれる中で、いつも自身に疑問符を与えている。何時から私は、今もなお大好きな社長の顔をまともに見られなくなったのかと…。

「社長、それでは失礼いた…」

「仕事のカタがつき次第——戻って来い」

今日もまたソレに答えを出せぬまま、伏し目がちのまま踵を返そうとしたところ。最後まで言葉を紡ぎ終える前に、仰揚のない声色にバツサリ断ち切られた。

「ツ・・・」

その指示によってビクリと小さく肩が揺れれば、ドキンと大きく脈打つ鼓動に思わず息を呑んだ。

おずおずと遠慮がちに見上げれば、此方を一点に見下げていた社長と目が合ってしまう。

「いいな？」

「っ…、はい」

本来であれば必須の“かしこまりました”さえ紡げず、YESの意思表示をするだけで精一杯だった。

こうして敢えて返事を求めて念を押すのは、彼が今後を見越しているため。“同意の上だった”と言わせることで、面倒な揉めごとを回避出来るのであろう。そんな苦しみ混じりの返事が届いたか判らぬ頃合いにはもう、ボタンとブラウン色の重厚な扉は閉ざされていた。

昔のように笑顔さえ向けられないほど、貴方にとって私はどうでも

良い存在だと知らしめる――

それでもギュッと締め上げる胸の痛みを誤魔化して、何にも気づかないフリをするだけ。こんなトコロで泣けるほど、もう子供ではないのだから。

そして何より、酷く残酷な態度ながらも、変わらず愛おしい社長の命令を受ける為には我慢だ…。

“社長室へ来い”というただ一言。たったソレだけのやり取りに、あまりの簡素な命令がグルグル脳内を占有する中。すぐに向かった秘書課で一時間ほど、スケジュール調整等の業務を淡々とこなした。

「それではお願い致します」

「ハイハイ」

秘書課にあるデスクで粗方のメドをつけて、おずおずと席を立った私。数名の先輩秘書に一声を掛けても、いつもと同じ素っ気ない返事が聞こえてくるだけだ。

入社したばかりの私が社長秘書に収まるという矛盾さは、当然の如く疎ましく思われていても仕方がナイだろう。傍からすれば、経験・スキルゼロのまったくの新人が大企業の社長秘書などオカシな話である、私でも分かっているのだから。

色々と覚悟を決めて入社したハズだというのに、やはり居場所を見

つけられナイ日々もまた息苦しい。

ソレでも諦め悪く、未だどこかに居心地の良い所を求める自分が、あまりに滑稽に思えてしまう。

さらに重い気分を携えて秘書課を退出すれば、ひとり乗り込んだ箱型の密室空間で小さく溜め息を吐き出した。

これは浅薄な感情を抱く自身の戒めであって、これから待ち受けるコトを受け入れる準備でもある。

エレベーターを降りた私は、忠実に言いつけを守らねばと再び重い足取りで社長室へと向かう。動揺に突き進んだ最奥で立ち止まれば、すっかり見慣れた重厚なブラウンのドアと対峙する。

キッチリ閉ざされたそれは、まさに私たちの間柄を示す大きな隔たりのよう……

この扉の先に待つモノは無情な苦しさで虚しさだけで、ソレを想像すれば胸がまた締めつけられて止まないというのに。泣きそうになりながらもどうしてか…、自らの手は当たり前のようにドアへと吸い寄せられる。

ドアの先で待ち構える貴方によって、さらに儂い想いが募ると分かっただけでもなお。

終わりの見えぬ“契約”に自嘲しながら、今日も私はそのドアをノックしてしまうの…。

密事の、始まり。 1

重厚なブラウンのドアと手の甲が触れるまでその距離、あと数十センチのところでピタリと静止するのは癖であった。

その手から力が抜ければブランと頼りなげに宙を彷徨い、手の代わりにドアへ触れるのはおでこだ。

この“今”というトキからすべてを遮断したいと、小さく自嘲しながら目を伏せるのもまた常である。

「もう、ヤダ…」

シンと静まり返ったフロアであるものの、蚊の鳴くほどに弱々しい声はきつと誰の耳にも届いてイナイだろう。

当然の如く、このドアの向こうでで淡々と仕事をこなしているであろう社長にも――

現に何度となくしている“コレ”を、中へ伺ってから質されたコトはただの一度もナイ。まさに幼馴染みのカテゴライズが外れた現在、彼はいっさいの感心を私に向けないのだ。

すべてを“YES”で返すことを義務づけられ、日を追うほど闇へと足を踏み入れるように蓄積する思いがあるけれど。

反旗を翻してNOを告げたとすれば、“契約を交わしたのは誰だ？

”と、さらなる冷たい視線を投げ掛けられるのが関の山だ。

たとえ幼き日の拓海の面影を追って、未だに縛られ続けている無常な想いがあつたとしても。このドアの先で待つ、まさに虚しさだけの募るモノが絶望感を増幅させてゆくのだとしても。私はそのすべてを開けてはならぬパンドラの箱に封じ、決して解けぬ頑丈な鍵を掛けるしか許されない。

希望を失いながらも、すべてを受け入れるコトが仕事——元を返せばそれを承諾したのは私であり、佐々木の姓を名乗る者に拒否権の余地はナイのだ。

これは日本有数の名家として知られる東条家に、永代仕えて来た佐々木の末裔として一生続くであろう。

そのためこの名を捨てることが出来なければ、彼の許を去ることすら許されない立場なのだ。むしろ主君に対して感情を持つコト自体が間違いで、オカシイな話であるのだから……

「ハア…、よし！」

すべての迷いをムリヤリに封じてから自らへ小さく喝を入れると、ドアからおでこを離して体勢を戻した。

「社長…、失礼いたします」

今度こそ重厚なドアに手の甲をつけ、コンコンとノックしたあとドアノブを回して、その扉をようやく開く。

「――遅いぞ」

その先に捉えたものは、爽やかなライトブルーのネクタイに手を掛けて少し緩めながら革張りチェアから立った社長の姿。

「ごめんね…、拓海」

何度見ようとも慣れない色気を纏う仕草にドキリとさせられつつも、彼とのキヨリをゆっくり縮めるように社長室へ入室する。

このトキだけは愛しい貴方のことを唯一、昔と同じ呼び方で“拓海”と呼ぶことを許されるの――

そう頼りない声で貴方の名前を呼んだ瞬間に私はいつも、幼馴染みとしての演技をスタートさせる。

不安がる心を宥めるように主役女優になりきり、これはゲームと思いつく以外に道はナイと分かっているの。ひどく愛おしい貴方との密事を、ごく自然な笑顔で受け入れるためには…。

足が竦みそうな私がゆっくりキヨリを縮めてゆくのを、その場からジッと捉えて悠然と待ち構えている彼。この瞬間、拓海が映すモノは私ひとりだけだから、歩く速度は決して速めようとシナイの。

一歩ずつ前へと着実に、ゆっくりと踏みしめるようにして彼の許へ歩み寄って行くけれど。この僅かなトキにも決して、演技に手を抜けないから緊張が走る。

いかに最上の笑顔を貼り付けられるか――彼に嘘を気づかれないためには、とにかく心から楽しんで見えるように細やかな演技力が必要とされるのだ。

何度目か分からぬ今日もまた、自信のなさがいつ露呈するかヒヤヒヤで。にこり貼りつけていた笑顔の裏では、色のなさない眼差しにキュッと胸が締めつけられる。

それでもなお、演技中の身である今はソレを晒せはしない……

ふと生じる惨めな感情には、ゲーム中だと言い聞かせてムリヤリに闇の中へと埋めてしまう。この浮かんでは積もりゆく想いのすべてが、社長にとっては煩わしいモノでしかないのだ。

アノ日に交わした“契約”を忘れないためと、体面の理由を表の心で掲げつつも。どうにかキライになれるようにと、密かにおまじないを唱えてもいるの。

どうしても、何を願っていても…、全身全霊で貴方を求めてしまうとは一生誰にも言えナイから…。

密事の、始まり。 2

一言で表現するならば、決して終わりになき思慕感情。これを仕える主君に抱いているコト自体、ご法度の立場であると分かっているから。

必死にすべてをひた隠しにし、断じて心の内を悟られてはダメなのだ。

優しい香りがふわりと届くほど今すぐにも触れそうなキョリに近づき、ぴたりと立ち止まれば。何をする訳でもなく、ただ向かい合う形となる。

「蘭・・・」

「…っ」

沈黙を切り裂くのはいつでも清涼な声であり、低く落ち着いた馴染みある音がゾクリ鼓膜を揺らす。爽やかでいて甘いホワイトムスクが一層のこと香り立った。

いつもと同じく、ただ名前を呼ばれたのだとしても。それは私の内心にボツと炎を灯す威力を持ち合わせているの。そうだとはい、決して誰にも言えないけれど…。

「なに・・・？」

すべての邪な感情を奥へと押し込み、ゆっくり遥か頭上にある綺麗な顔に問い返せば。どこか優しい印象を与えるブラウンの瞳と合致し、またひとつ鼓動が高鳴った。

気を緩めれば今すぐにもパンドラの箱に固く封じ込めた、つよい想いがドツと溢れ出しそうになるから。表面上はどうか笑顔を浮かべて、自身には小さな叱咤をするばかり。

貴方とのコレは契約事項ではないと、僅かなトキで良いから都合良く勘違いをしたい。もしも…積もった本音を、いま素直に口に出せればどれほど幸せなのだろう…？

今後の贅沢は一切望んでおりません。私が願うのはひとつです。目の前にいる、拓海に好きだと伝えさせて下さい――

…それでも実る前に絶ち切られた想いは、今日もまた“好き”と伝えることが許されないでいる。たった一言の重みを知った今は、全てにおいて勇気を失い、たったひとつのフレーズを伝えるコトも叶わナイ。

もう…様々なもので、もがき苦しむ現状から脱却してしまいたい。すべてから放たれて楽になる方がきつと、と思う自身こそ狡猾なものだと悲しくなるの。

押し寄せる感情が胸を苦しめ、何度でも願い続けた想いは虚しさを増すばかり。否応なく押し寄せる痛みに屈しかけては、どこかで想いをしたためて狂乱したいと祈る矛盾。

なぜ私の定まりを見せない心中は、此処までして貴方を求めているのだろう…？

すると相変わらず感情の見えない彼は、無言のまま慣れた手つきでグツと半ば強引に身体を引きつけた。

まるで心の奥底を表すように愛しい彼の胸へと引きつけられた私は、トンと小さな弾みによって厚い胸へとこの身が収まる。

やけに静寂に包まれた社長室内で、広々としたスペースを無駄にしているコト極まりない密着度。トクトクと徐々に速まる鼓動が伝わらないか不安になる。

後頭部を大きな手で抑えられた私は、今日も身動きのとれぬまま息を潜めた。狭まった視界が捉えるのは、見覚えのある爽やかなストライブ・ブルーのネクタイのみ。

ごくごく自然にこの身を預けているのは、私を引き寄せた本人の広くて厚い胸という環境下であり。ふわりと鼻孔を掠めゆくのは、親しんだホワイトムスクの甘く爽やかな香りだ。

それらにどれほど感情が左右され、どれほど心から欲して止まないとしても。あまりに隔たりの大きすぎる今は、何も手に入らないという愛おしい彼の存在証明である――

すでに解っていてもなお、日々ムダなほど自身に苦しみを与えてし

まうのだろう？どこまでも浅薄で、いつまでも諦められず、何かと単純すぎるこの感情が恨めしい。だけれど…求めてはイケナイと思うほど、懐かしさと心地良さでいつでも侵食されてしまうのも事実。

幼い頃の想いが抑制を勝った今、すっかり落ち着きを失くした鼓動の高鳴りは止まらナイ…。

密事の、始まり。 3

吸い込まれそうなほど澄んでいて、やたらと色香を感じさせるブラウンの瞳に囚われた私は、このもどかしい現状に虚しさが募りゆく…。

「寝不足だろう？」

「・・・え？」

暫し流れた沈黙を裂くように、スツと耳に入って来る心地良い声。そう鼓膜を揺さぶったのは、言葉少なく放たれた優しい音だ。

昔と変わらナイ清涼な声色に苦しさを覚えつつ、無表情さからその意味をを探るように見上げてしまう。

すると伸ばされた手で、優しく頬を撫でるように触れられるから。その刹那、鼓動をさらに押し上げ、一気に熱を帯び始めていく。

ただ一点を捉える鋭い眼差しに背くことが出来ずにいる私は、すでに彼の魔力に囚われたみたいね…。

「目の下、クマが出来てる」

「…気づかれて、た？」

こちらを覗き込むように傾げて、ごく僅かに笑って付け加えた彼。対して、おずおずと遠慮気味に苦笑して返すから、余計な不自然さが際立ったというのに。

「蘭のことなら当然だよ」

「ッ・・・」

息を呑むほどの、至近キヨリという不利な状況下。何よりも先ほどから頬から手は離れず、いつになく優しく一笑した拓海。

あまりに美麗なその表情をにわかに崩し、フツと柔らかく一笑するものだから。当然ながら、貴方にとっては当たり前、些細な表情筋の変化であるとしても。

ひたすら想いを隠して隠して、綻びだらけで演技に集中するしかない私は無用な鼓動が加速してしまうだけなの…。

「まだ眠いのか？」

「・・・かな？」

それほど…人生の半分を一緒に歩んでいた、過去の筋道と思い出があるから。覚えて来たメイクテクを駆使してもなお、何時も貴方には寝不足加減がバレてしまう。

「低血圧のクセに…」

「拓海だけには言われたくないわ」

“演技をしている” 今だからこそ許される、社長である貴方へのフランクすぎる言葉遣いも懐かしいものに感じるの。

このごくごく僅かなトキにだけ許される、少しだけ伝い出る本心はどうしようもナイ。

「蘭よりはマシだと思うけど？」

「っ、そんなコト…」

まるで触れられている私の反応を楽しむかのように、その大きな手で頬を撫でて笑うものだから。コレがどれほど苦しいのか…、何も知らない彼の所作に“残酷”という二文字が浮かんでは消えていく。

それでもこの穏やかなトキは、ただの序章にしか過ぎない。ううん、拓海がトキを楽しむ為に用意したオプションであるから、これらに逆らう術は一切ナイのだ。

敢えてコレに名をつけるのだとすれば、中身のない“擬似会話”がしっくり填まる。まさにその場限りのウソで彩られた、幻想空間であるから…。

「それなら…、お互い様じゃないの？」

この場で偽り切れぬモノは、今も葬り去れない自身の感情だけ。その一切を押し殺して、誰より大切な人に笑みを零していただけるから。

自他共に認める、世渡り下手だというのに。此処だけは物分かり良く、サラリと演技を続ける、惨めな自身が涙を誘ってくるの。

「フツ、それもそうか…」

「・・・ッ」

ねえ拓海…、貴方がいま優しく笑い掛けてくれるのは、偽りの私が相手だからなのでしょう…？

何か納得したように笑みを浮かべた彼の整った顔が近ければ、置かれていた2人の僅かなキョリをグツと縮めていく。

これからはさらに、私にとっては苦しくて、意味を成さぬカンケイへと誘うためのスタートとなる。次第に詰められる距離に伴い、ふわりと舞い上がるホワイトムスクの香りで息を吞んでしまった。

まるで粟立つように性急な反応を見せ、一気に細胞が波打つのだから、心に嘘はつけないとはよく言ったものね。

どうしようとしても、どうしてみても私は振りきれずに、今日も貴方のすべてを全身で求めてしまう――

せめてもと平静を保つことに終始し、願ってやまないアノ言葉を発してしまいうさな口を固く結ぶだけ。

コレは契約があつてはじめて成り立つモノだから、拓海は今日も私のことを利用してくれるのだと…。

「ああ大丈夫だよ。睡眠欲より性欲が増せば、すぐに楽になれる…」

「ん、…ンンっ」

妖しさを含んだ声色によって、さらに鼓膜がブルッと揺れた刹那。グツと押しつけるように塞がれた唇に、彼の温度がどこか性急に重なった。

こうして強引に塞がれる始まりも、ある意味では救われているのかもしれない。触れる先から急上昇する体温と、空気感に絆された熱に乗じて伝えたくなる想いが告げられられなくなるのだから。

もう契約だけはイヤ…、昔のように真実の私ほんとうを見て欲しいと――

だけれど感情を晒すなど許される訳もなく、まして均衡を壊す勇氣は今日も生まれない。これは貴方とって発散的ゲームであり、契約がなければ私は“無”に等しい存在だと分かっている。冷たい眼を向けられた、アノ日にすべて理解しているから安心してね…。

「秘書になって貰う時点で、もう幼馴染みじゃなくなるから」

「・・・え？」

幼き約束に恋心とともに、今か今かと待ち侘びていた貴方の帰国日。その前後は念願が叶うことに嬉々としていた私に、ようやく再会を果たした日の貴方からの言葉。

ソレは夢に描いたものには程遠く、そして非現実的すぎて何も言えなかったの。拓海の口調もまた一方的に感じ、冷たいブラウンの瞳はさらに2人の間のキョリを遠くするモノでしかなかった…。

【私、佐々木 蘭は本書をもって下記の契約事項通り、東条 拓海の傘下に入ることに同意いたします。

いかなる場合にも私情を挟まず、是を最後まで遂げると、併せてここに誓い申し上げます】

「な、なんなの…、これ？」

「何って…、その文面の通りだよ。

蘭、悪いけどサインだけで構わないから、早くしてくれないか？このあと会議に参加することになっているから、あまり時間がないんだ」

「・・・っ」

固すぎる文面を一瞥しても到底意味など解らず、答えを求めたくて拓海へと苦笑しながら伺ったものの。

彼は無表情のまま何も語るコトがなく、あまりに無機質な契約書へ

の承諾サインを要求するだけだった。

冷たい眼差しと発言によって、拒否するコトも出来ぬ立場と雰囲気へと包まれたから。もう昔のようには無理なのか、と言われるがまさに震える手で契約書にサインをした私。

確かにはじめは誓約書の小難しい文言に苦戦して、何も理解出来なかったのは事実だけれど。いたく出来が悪いながらも、時間が経つにつれて解ったコトがあるの。

これは永代仕えて来た、佐々木を名乗る私に生まれたトキから課せられていた宿命なのだと……

主君たる貴方に仕えて秘書を全うすれば、ソレで良いのだと半ば諦めていたというのに。失恋にぎゅーっと胸が締めつけられ、苦しい中で出した答えすら見当違いだったのね…。

隠憂の、始まり。 1

始めから勝敗の判っているモノには、進んで挑戦しようと思えナイから。間違いなく神様から、臆病者の烙印を捺されているに違い無い。

だけれど愛おしいヒトの本音を垣間見たトキ、すべてに際して諦めグセが身についてしまった。この不実なキモチを、パンドラの箱へとムリヤリに封じ込めることに耐えかねたように…。

ボタンツと忙しく閉まる音で密室を作り上げられると、前方にはキングサイズのベッドを捉えた。“秘密の部屋”と代名詞のつく室内には、ホテル同様なシャワールームが完備されている。この広々とした内部はもとより、存在を知る者は社内でゼロに等しい。

なにより、こうして足を踏み入れるコトが許可されるのは、彼に命ぜられて利用する私だけであろう…。

此処の存在理由…、そして意義を考えるコト自体が馬鹿げた話だ。ソレを疑問符として口に出来るほど、今の私はコドモではナイから。だからこそ、いま身体をしっかりと支えてくれている腕の力強さも、ふわりと鼻腔を掠めている、ホワイトムスクの花舞う甘い香りも。そのすべてに対し、人形と化した私が勘違いを起こしてはならないのだ。

抱き上げられていた身をそつとベッドへと下ろされれば、スプリング音がギシッと静かな空間に響いた。

いつも弄ぶだけの存在にすぎない私を、あまりにゆっくりとベッドへ寝かせてくれる拓海の所作。その壊れ物でも扱うかのような優しき扱いが、勘違いを引き起こしそうになるから苦しいの。

結局は人形でしかない私に対して、この時ばかり優しさをかける貴方こそ凶器なのだと気づいて欲しい。

諦めたように真っ白な天井を仰ぐのが最早私のクセであり、純白で曇りなき様が心をリセットしてくれる。この僅かな時間のお陰で、どうにか演技派の仮面を纏い続けられるの――

ふうと小さく息を吐いたその刹那、少しの重さとともにギシリと、ベッドのスプリング音が鳴り響いた。

「蘭・・・」

優しい声色でもう一度名を呼ぶと、甘く爽やかな香りを漂わす拓海。私の上へと跨るようにして覆い被さって来る。

さらりと愛でるような手つきで頬を撫でるから、鼓動がまたトクリと高鳴り始めた。優しくも清涼なブラウンの瞳に囚われて息を吞めば、見つめ合うそのキョリが少しずつ縮まりゆく。その度に鼻腔を掠めるホワイトムスクの華やかな甘い香りが、懐かしさと焦燥感を誘って来る。

そのどれもが私を惹きつけて、また引き寄せて、決して逃れられナイ魅惑を放つから、どうしても抗えなくなるの…。

「ンンッ・・・」

チュッと妖しくリップ音を立て重なった唇の温かい感触に興じて、逃れられない現実から背くように眼を伏せるのが常だ。

唇が重なったこの瞬間から、もう他事は何も考えない。ただ一心に彼を求めて、愛おしいヒトとの時間に酔いしれるだけ…。たとえ貴方の齎すモノが愛しさと虚しさを募らせ、さらには切なさとしみじみをまた背負うだけで。これらすべてが混ざり合い、自身の中でまた不協和音が響き始めると分かっているもお。

ひどく凄惨だとしても、この隠憂なトキの始まりを心は求めて止まないのだから――

隱憂の、始まり。 2

そつと触れるようにいつも優しい口づけから始まるのは、彼の人となりを表しているのかもしれない。そして段々と奥を求めて深くなる様になす術もなく、今日も私はそれを受け入れるだけだ。

「ん…、ふっ」

いつしか激しく絡められて取られていた舌は熱を帯び、一方でしなやかな指先が身体を弄るその二重奏によって、続きの演技をする余裕さえ与えては貰えナイ。

テクニシャンの称号に値するキスの巧さに翻弄されれば、息苦しさを覚え始めてもその合図すら難しい。ただホワイトムスクの香りが脳内を占領して、ソレに酔いしれるからクラクラと眩暈を起こしそうになるの。

「ふう、…あっ、」

結局は夢遊状態ともいえる中でどうにか気を保ちながら、激しく降り注ぐキスの往来にしがみつくだけ。

まして私が彼を求めているナラナイのだ。抵抗は当然ながらご法度だけれど、誘う声音はまだしも彼には誘いなど不要のハズだ。幾重にも絡められゆく舌先、さらに弄られ続ける身体は、身体の芯から熱

を帯びて呼吸が荒くなる。

ここでも優しい指遣いとキスに勘違いを起こして、つい求めてしまいそうなるから。どれほどセーブするのに必死か…、当たり前だけれど貴方は知らないだろう。

こんな私でさえ丁寧に扱ってくれるトコロが、拓海らしいね…。

「…あ、ンッ——」

妖しい水音を室内に響かせながら、複雑に絡まり合う舌と舌。そして塞ぐように重なり続ける、激しいキスの嵐は止まない。

ソレらですっかり絆された私から漏れ出る熱の籠った声と、角度の変わる度に鳴り響く甘いリップ音。なおも口内へ侵入し続ける彼に、いささか勘違いな想いを吐き出せば良いのに。だけれど、ソレだけは絶対に死守せねばナラナイから。

あまりに酷すぎる代償だと心が悲鳴を上げるように、目の奥でツンとした痛みを覚えるのは常だけれど。

貴方が触れてくれる今の私は、演技派と謳われる名女優——悲しみで覆われた脳内を快楽で覆い尽くして、幸せだと思い込むことで必死なの。

身体を駆け巡る甘い熱に反し、切なさと苦しさに埋め尽くされる心が相対するから。惨めな心を自身で労えば、それがさらに惨めな行為なのだと思い知るだけ。それでもなお、内に秘めた想いを隠し続けるという弛まぬ努力に安らぎを求めてしまう。また自身を窮地に

追い詰めて、泣きたくなるのは何故だろう…？

「んっ…、」

彼の指先によって緊張の取れ始めた身体は、その容赦ナイ攻撃に勝てるハズなどない。さらにそれを欲して漏れ出していた熱い吐息と、甘さと苦しさの共存するくぐもった悲しき声音。

ここで想いを伝えたくても、キュツと口を固く結んで封じることが忘れてイナイ。これが今の私に残された、なけなしの抵抗だろう。ソレでも体温の上昇は留まりを知らず、もうギリギリと言わんばかりの地点へ到達したトキ。塞がれ続けていた唇がスツと離れて、なぞるように首筋へとその熱を移してゆくから。

「あ、…っ」

移り変わりに従順に応じた身体は、彼が求めているであろう甘い声音を返し、ピクリと緩い電流が走ったように震えていた。

触れられる先から新たな熱を発する理由だけは、せめて彼のテクニツクのせいと思わせて欲しい。

しなやかかつなぞるように、キツチリと身を固めていたスーツは容易く剥がされる。さらに朝から時間を掛けてスタイリングしたヘアは、既に乱れかけている状態からヘア・アイテムが取り払われた。秘書として必死に纏っていた私の鎧は、こうして今日もまた彼によって解かれてしまうの…。

「蘭・・・」

いつもの清涼さに僅かな熱と甘さがプラスされたセクシーな声韻が、耳元をくすぐるように響くから。上り詰めるだけの身体はもう、この音にすべてを委ねたくて堪らない。

求めてはダメと思いつつ、自然と拓海の首へ腕を回す自身は愚かだと分かっている。触れるコトでさらに想いと熱が加速し、このキモチが強まるから悲しいものね…。

「フツ・・・」

すると今日もまた溜め息をつくように、とても軽快な声音で一笑した刹那。徐々に狭まる間隔をグッと性急に縮め、私の耳元へそのぬるい吐息を吹きかけて来た。

ビクッと反応した私をブラウンの瞳で淡々と見つ、この僅かなキヨリさえゼロにしようとするから。

もうこれ以上、さしてない空間をもっと埋めるように、なお絡むようにその逞しい腕が伸びて来るの。

隱憂の、始まり。 3

人を魅了して止まないブラウンの瞳でジッと此方を捉える彼の、甘いホワイトムスクの香りに包まれながら体温に酔いしれる状況では、息を呑むばかりで何も考えられない。

こうして今日もまた拓海は、じわりじわりと私を追い詰めるの――

「蘭、どうして欲しい？」

「っ――」

再び鼓膜を揺らす落ち着いたテノール調の声音と眼差しが向けられ、そしてなす術もなく一気に侵される。

これほどにしながら確かめるように尋ねるけれど、引き出された熱は今もなお上昇途上でいて、人形と化した私に抗う理由は一切見当たらない。このどうにもならない状況を、拓海のせいに出来れば少しは落ち着くかもしれない。

「言えないのか？」

それを知っているのか計り知れない……いや彼は口籠る理由を見抜いていると思う。だって、投げ掛けられた命令口調と瞳がそれを物

語っているから。

「た…、くみ、」

肯定の意を込めてフルフルと頭を振ったものの、否応なく反応する身体と心がまた小さく悲鳴を上げた。

だけれど、何も明かせはシナイから。たとえこの状況が辛いとしても貴方は一切構わず、いつでも確かな言葉を求めるからズルいと思えてしまう。

小さな頃から一般人には縁遠い帝王学に触れて、それについて学び育って来た拓海。だからなのか、周囲は当然のように、彼のことを冷静沈着であり慈悲深いと称賛する。また誰に対しても平等で優しくあり、常に笑顔の絶えない朗らかさは、賢さをさらに際立たせるとも言うのだ。

幼き頃は共に時を重ねて来たから、私は心のどこかで周囲よりも彼のことを知っている我慢していたのだろう。それがあまりの完璧さゆえ、すべてが虚構であったとも見抜けずに…。

一抹の苦しさを払拭するには、ほど遠い彼とのキヨリは目を伏せることも叶わない。触れるか触れまいか…、あまりにギリギリの中でクイツと顎を引き上げられた。

「…俺に逆らう気？」

「ちがつ、」

曇りのないブラウンの眼差しと対峙すれば、頭を振るコトはおろか抵抗の言葉さえ吐き出せないから虚しいものだ。

「佐々木の娘が“俺に”逆らうつもり？」

「・・・っ」

付け加えられたこの言葉が、どれほど私を痛めつけると知っているのか尋ねたい。グツと込み上げそうになる何かを必死に耐えて、無言のままに堪える自身が愚かに思えた。

“佐々木の娘”——ひどいよ…、どうして此処でソレを引き合いに出すの？

蔑んでいるとしか思えないフレーズと、向けられる眼差しがあまりの冷たさを帯びているから。今もなお受け入れたくない“禁句”が心の留め金を外し、目の奥にツンとした痛みで苛まれてしまう。

「此処が、泣くところ？」

ソレでも顔色ひとつ変えずに小さく一笑する貴方が、ひどく残酷な人物に映った。視界がボヤけ始めてまた、今も抱く淡いキモチが踏み躪られるだけだ。

いつそのこと、キライになれば楽なのに——そう考えるのは、これで何度目になるのかな…？

二面性もといトップシークレットを知らされたことで、それまでの

彼のイメージがガラリと一変した。当たり前だった笑顔の裏に潜んでいた、冷たい眼差しを向けられた日をきっと忘れはしないだろう。愛しいヒトは密かな二重人格者であり、酷いオトコと位置づけた日でもあるのだから――

幼馴染みもあれほど鮮やかに欺けたのだから、この場限りの効力しかない私の拙い演技力など、彼には嘲笑に値するのではないかと思う。その彼を何年も信じて待ち続けた年月分の想いを理由に、この場から逃げずに留まるとは愚かなものだ。

「あっ、んん……っ」

頬を伝うより早く拭われていた、この場に不要な涙は堪える余裕もないけれど。しなやかな彼の指先が新たな熱を生み出し、苦しみを今は忘れさせてくれる矛盾。

こうして着実に進みゆく狂おしい時間は、私から正常な判断を失わせてゆく――

『もう蘭は、幼馴染みじゃない』とあっさり吐き捨て、茫然自失だった私の唇を易々と奪ったアノ曰。

様々な意味で純粹すぎた私の身体を、当たり前のように容易くこの指先が蹂躪したアノ曰。

その貴方は無知であった私へ同時に、“東条家”と“佐々木家”にまつわる歴史を知らしめたけれど。ソレがどれほど酷であり、惨めなものであったか未だに分かつては貰えナイだろう。

だからこそ何も解らないまま、素直に笑っていられた幸せなアノ頃をただ回顧して。この虚しきトキを受け入れるために、パンドラの箱へ感情を押し込めた人形と化したの。

自身の営利のみに生きる、拓海の甘言を受け入れてはナラナイと思ひ込めば。まるで愛でるような手つきや、こちらをジッと見下げるブラウンの瞳の優しい色も奥底へは響かないだろうと…。

「愛してる――」

「・・・ッ」

それでも私は、大きな勘違いをしかねない場面が多々あるの。今日もそっと囁かれたフレーズが涙を誘うけれどダメ…、これはこの場限りのまやかしかだからと言葉を吞むだけだ。

“アイシテル”――まるで機械的に紡がれた、ソレを嘲笑したくてもとても出来ない。たとえ貴方を悦ばせたカラダへの賞賛と理解してもなお、心が受け入れたくないと笑顔を失わせるから。契約の続く限りに囁かれるコトバたちは、あまりにも残酷すぎるの。

入り乱れる息苦しい感情に反して、さらに満たされゆく身体で嘆く権利などゼロだ。まして馬鹿を見るコトを恐れる弱虫な私には、何かに縋る小さな勇気も残されていない。

もう以前に引き返せないほど、歪んだ関係が築かれた私たちを繋ぐモノは唯一、この虚しさの取り巻くトキだけであるから。

儂くも無邪気に笑い合えたアノ頃へ戻りたいと、願うことすら諦めた今はもうあり得ない…。

繚繞の、始まり。 1

あれほど悠然と綺麗に咲き誇っていた桜の花弁が、春風によって一瞬でハラリと散りゆくように。

どれほど情事の始まりが濃厚であろうとも、その終わりといえども実に呆気ないモノだ。

「早く戻るように――」

「…はい、かしこまりました」

熱いものを吐き出されたあとは一変する冷たい声色に、どうしようもない虚しさがグツと押し寄せて、微かな演技力さえ容易く潜めさせる。

そう、此処を境として幼馴染の粹を外されてしまった私は、再びただの秘書へと戻るのだ。

少しシワの寄ったシートで身を隠している私をよそに、爽やかな色のネクタイをキュツと締め、少し乱れていた髪を手櫛でサツと整えた社長。何気ない所作さえ優雅さを漂わせるのだから、自然と眼で追ってしまうのも致し方ナイと諦めているの。

「あと30分で出発する」

「…はい、かしこまりました」

そうして手早く身支度を終えて出口へ向かった彼にくくりと頷けば、まるで未だ佇む私を急かすかのように、重厚な扉がどこか忙しない音を立てて閉まった。

この閉ざされたドアの向こうで既に平素のまま、積み重なっている仕事へ取り掛かったハズの社長に対し、広々としたベッドで動けぬ私はまさに置き去りの人形だ。シンと静まり返ったこの部屋は、急速に身体から体温を失わせてゆく。

こうして取り残されたモノは、ほんの僅かなホワイトムスクの甘い残り香と虚しすぎる余韻のみ――

貴方が素知らぬ顔で置き去りにした、内外に迸るアトが今日も苦しめさせるというのに…。すっかり鈍くなった身体をどうにか起こし、纏っていたシーツを大胆にも取り去れば、勝手知ったる室内をそのままの姿で歩いてゆく。どうせ独りかぎり――羞恥心を起こす必要もないと分かっているから、何にも気にしないで良いの。

辿り着いた場所は、ほわほわ上る湯煙とポタポタ水滴の落ちているシャワールーム。まさに先ほどまで拓海が使っていたという、小さなシルシが今日も出迎えてくれた。

裸身の寒さと孤独感が取り巻く中で、躊躇いもなくそこへ足を踏み入れた私は、急いでシャワーを捻り放出させるばかり。

「うっ、…ひっ、」

どうしても其処で込み上げるモノを耐え切れず、ただただこの状況

が息苦しくて、揺らぐ視界が臨界点ギリギリで。止め処なく肌を打ちつける湯の水流に任せ、萎れそうな心の思うままに咽び泣いていた。

拓海にとっては無意味な行為であっても、諦めようともがく想いをまた募らせるから。このシャワーがいつそのこと、すべてを洗い流して忘れさせて欲しいよ…。

「ひっ…く、ううー…」

打ちつけるように肌を弾いていくシャワーの水音は、こうして無用な涙まで誘っているけれど全く構わナイ。どうせ彼の耳に届くことはないし、それを案じて貰える間柄ではナイから。

幼馴染みという縛りが、如何に脆いモノなのか。誰よりも近いよう
でいて、如何に遠い存在であるのか。

ずっと続くのだと信じて疑わなかった関係が、諸刃の剣であったと知らされてからは。この世に生を受けてからずっと貴方と過ごした年月が、ガラガラと雪崩のように呆気なく崩れ去っていた。

まさに一度崩れたモノは修復不能だと、日を追うごとに痛感するばかりであるから。何も分ならず、ただ彼の隣で笑えていた頃を回顧し、楽しいばかりの思い出に縋りたくもなる…。

“必ず戻るから、待ってて”——かつての拓海が、アメリカへと旅立つ日に掛けてくれた嬉しい言葉。

“うん、頑張ってたね？”と聞き分けよく寂しさを堪えて見送った当時は、彼のすべてを信じて疑わなかったの。

もちろん中学生であつた私にとって、異国はあまりに遠すぎたから我慢する外なく、彼が向かつたアメリカという地に思いを馳せるばかり。もちろん余暇にバイトでお金を稼いで会いに行こうとしたけれど、両親からの反対を受けたために敢え無く断念。

幾重の海や大陸を越えて、はるか遠方で寂しさと共に過ごした数年間。ソレでも約束に忠実に過ごし、ただの一度も泣くことはなかった。それはきっと幼心ながらに、何処かでアノ時の彼の言葉にどこか期待を抱いていたからだと思うの。

“待っていてくれ”と笑顔で与えてくれた約束は、その後の何かが変わる音がしたから――

約束の未来が無かつた知らずに待ち続けていた私は、貴方にどう映っているのか今はとても計り知れない。アメリカと日本で離れて過ごしていた時よりも、どれほど現在はすべてがかけ離れているのだろうか？

決してあと戻りの出来ないカンケイを形成すればするほど、大切な過去をも悲しく蝕んでゆくというのに……。

「ひっ…、く…――」

もう数分と止まないシャワーの水流は、人知れず泣ける僅かなヒトトキでもあるから、ポロポロ零れ落ちる涙は止まりそうになかつた。こんなにも泣き虫であつたとは、オトナになるまで知らなかつたし…、出来れば知りたくなかつたよ。

たしかに幼馴染みの縛りは、とても脆くて儚いモノ――幼き頃の関係がいずれ変わるとは、心の何処かで覚悟していたの。だけれどイビツに変化してしまうより早く、いっそのこと無関係になれば良かったと思えてならないの。

幾年も貴方と育んで来た、大切な絆と想いが、契約という“縛り”で繋がれるくらいであれば…。

「蘭…、聞いてたか？」

「え？あ、の、申し訳ございません」

とても余韻を浸ることなど出来ず、過去にまた息苦しさを覚えていたその刹那。隣から響いた爽やかな声音によって、グッと現実へ否応なく引き戻された。

「これから人と会うというのに、ボンヤリしないでくれ」

「申し訳、ございません…」

呆れたように溜め息をひとつ吐いた社長からは、先ほどの行為の面影も何も一切感じられナイけれど。

その彼に所在なげにポツリと謝る私もまた、ひとつ覚えのように謝罪の言葉を発するのみ。――まさに謝罪しか出来ない、ひとつ覚えで役立たずなロボットかもしれない…。

あれから暫く涙に濡れたあと準備を終えた私は、社長と共に本日の商談相手の待つ会食場所へと向かっていた。

彼から唯一、望まれた契約である、秘書としての務めも上手く履行

が出来ず、こうして過去を懐かしむだえの自身を自己嫌悪に陥る。
何より社会人として仕事中に甘えなど許されないのだから、と心を
叱咤するばかりだった…。

繚繞の、始まり。 2

まるで街並みを切り裂くかの如く、今日も颯爽とした走りを見せる真っ赤なフェラーリ。その優美かつ独特なエンジン音とは対照的に、私の心はとても晴れそうにない。

こちらを気にすることもなく、無言でハンドルを握る社長の隣に居ればまた想いが増幅するに過ぎないもの。

その黒ハンドルを捌く指先で、先ほどまで身体をなぞられていたとはウソみたいで。抱かれていたのが夢だったのではと考えるほど、すでに用済みの私は彼の視界に入らないのだ。密かにチラリと涼しげな横顔を一瞥するたび、悔しさと切なさが相俟ってグツと胸を締めつける。

結局アノ部屋での行為は契約であって、そこに感情はナイことを教えてくれるから――

一抹の寂しさと虚しさが取り巻き始めた頃、社長に悟られぬように自然を装って視線を正面へと移す。

この状況を辛いと思いつながら結局、何もせずこの場で甘んじているのは他ならぬ自分。これでは何時ダメ人間などの陳腐なレッテルを貼られてもオカシクは無い。不甲斐無い自身に消沈して小さく溜め息を吐き出せば、拳を作りギュツと握り締めた。彼是と今さら考あれこれえても、時すでに遅しというのに……。

初めから辿れば、不毛な想いを抱えたコトがそもその間違いであり、自身の進むべき道を間違えていた――ソレに気づいてからは、早々の諦めが常習化している。非条理な物ごとに対し、そうするの

が最大の防御だと捉えているのだ……。異常な考えとは分かっていても、その度に浮かぶフレーズが自身を正当化させてもいる。

私の今後は社長が飽きるまでという期限付きで、すべてが”契約”
ごとで結ばれた、”コマ使い”だと……

彼を慕って生きて来た今までを葬るには、ひどく貶してそう思い込まなければ、これからも人形としてイラレナイ。すべて遮蔽された遠いキョリに慣れるほど……。何も報われない人の傍で平常心で居られるほど。私は出来た人間でなければ、割り切れる強さも備わっていない。裏切りを肌で感じる現在、ヘラヘラと笑える強さも持ち合わせていないから。だから誰でも良い……。確かな生きる術を教えて欲しいよ――

過ぎゆくトキに身を委ねつつ何時になれば、強さという強固な武器が得られるのだろうか……？

いつしか心に沁みついてしまった、ホワイトムスクの香り。何時でも私を捉えて離さない、優しい色のブラウンの瞳。広くて厚い胸板で、激しく何度も彼の熱さを教えられながら。一体何をどうすれば、決して結ばれナイ幼馴染みだった、社長への想いを断ち切れるのだろうか……。

沈黙を共に乗せて走行を続けたフェラーリは、ほどなくして会食によく利用する、社長ご最良の料亭へと静かに到着した。

「行こうか――」

「はい……。お疲れ様でした」

そう言つて車外へ出た彼に頷き返し、助手席のドアを開けて出る。
さてお仕事だと、ムリヤリ感情を押し込めれば、負の感情を絶つよう
にそのドアを閉めた。

高さあるヒールが自信無さ気の姿勢を正してくれるから、こうして
彼の一步後ろをついて行くことが出来る。そう、何ひとつ答えが出
せない中途半端な私は、ただ目の前の道を前へと進むしか他にナイ。
たとえあと少しだけ速度を速めればすぐに縮むであろう、このキョ
リさえ無くす勇氣もナイのだから…。

ジャリジャリと、大きな玉砂利を踏みしめて馴染みの料亭へ到着し
た。威風堂々とした佇まいの歴史的建造物に、緑生い茂る手入れの
行き届いた素晴らしき日本庭園。

すべてが計算された至れり尽くせりの、絶妙なコントラストに今回
も息を呑むばかり——そんな此処は、古くから東条が鼻屑にしてい
る有数の高級料亭。つつましさの中にも洗練された印象を与える外
観は、温故知新という言葉を連想させられる。必ずお邪魔する前に
一度立ち止まり、その情景を静かに眺める社長は何を感じているの
だろう？オーラある広い背中を前にして止まる私は、今回で5度目
の同行であつた——

「ごゆっくり、お寛ぎ下さいませ」

「ありがとうございます」

東条家が足を運ぶ度に通されるらしい特別室へ案内されると、着物
のよく似合う女将さんからの恭しい挨拶によって、パタンと静かに

部屋の襖が閉められた。下座についた秘書である私と、上座で何か思案に暮れる社長が必然と隣合う座席。場所に変化が生じて、結局は彼との会話は別段生まれナイ。い草の芳しい香りに乗せ、ふわりとホワイトムスクが花舞う空間で焦燥に駆られながら、鼓動だけは高鳴るという矛盾がいつも襲う。甘い香りに浸食された身体は、朝方の熱を思い起こさせることなど容易いのだ。

そもそも責務を果たさねばならない状況で、彼との空間に緊張する私はどうかしている…。隣を意識してはダメだ、と自身に言い聞かせていた刹那、社長が溜め息ともとれる深呼吸を吐いた。

“どうなさいましたか？”と気遣いの言葉さえ言えず、ドキドキ高ぶる鼓動音に浸食されてゆくようだ。

上司と部下として、ありふれた日常会話さえ出来なくなった今。遙か昔から抱き続けた想いは、もう何ひとつ届かないとよく分かっているの。交わした”契約”が”幼馴染み”を絶った、虚構のカンケイで縛り上げられているから…。そう戒しめる度に、愛しい貴方の姿が時おり残酷なモノに映ってしまう。

既に結婚しているお友だちが、“愛しさと憎悪は、恐ろしくも隣合う感情よね”と口にしたことがある。

ふとした瞬間、何かのはずみで愛が憎に切り替わってしまうのは容易いこと。だけれど、その逆になり得るのは難しいよねと話していた。ただどちらにしても、後悔と未練が付き纏うのは否めないよねとも…。

その彼女はご主人さんと仲良しだから、どこでその話を仕入れてきたかは分からなかったけれど。ちょうど契約を結んだ直後の私は、そのお話があまりに自分のことに感じて、神妙な顔をしていたよう

だ。“やだ蘭、冗談だからそんな顔しないで”と笑っていたけれど、その言葉が今も着実に真実味を増している。

いつそのこと拓海を憎んでしまえたら、契約履行するのも楽になれると考えていても。愛しい彼が与えてくれた過去の優しさが、憎みたいと俄かに考える自身を後悔が残ると叱咤して許さない。まして憎しんだところで、何も生まないことは十分分かっている。

だからこそ私の場合、この想いをパンドラの箱へと固く鍵を掛けて封印するしかない…。

暫くして襖の向こうから、女将さんの柔らかい声が届いた。遠慮気味に返事をすれば、すぐさま枷となっていた扉がスーっと開かれる。

「失礼いたします、東条様——お通ししても宜しいでしょうか？」

「はい、よろしく願いいたします」

指先四点を床へつけ恭しい正座姿で尋ねる女将に笑顔を返せば、再び襖が閉められ彼女は踵を返したようだ。

チラリと視線を動かして隣の社長を窺えば、至ってクールな面持ちがビジネス・モードを漂わせている。

ずっとずっと、幼き頃から隣で見て来たハズの彼が、今なにを考えているのか一切読み取れない…。

繚繞の、始まり。 3

現実是否応なく立場を知らしめ、このキヨリは縮まるコトなく広が
りゆくだけという事実に苛まれてしまう。果てなく続く道と同じよ
うに、どこまでも一方通行な想い。幼馴染みとしての気安いカンケ
イも、今は昔の遠き過去…。秘密の部屋を一步出ればもう、貴方を
”拓海”と呼ぶことさえ叶わないのだ。

気づかれぬよう視線を元へ戻したものの。弱気な心を補えるモノは、
秘書という脆い肩書きのみ――

女将の気配が消えてから暫くし、彼女の柔らかな声に伴われて1人
の男性の声色も襖越しに届いて来る。再びの問い掛けに応じるより
早く、スツと立ち上がったのは拓海であった。

「後藤さん、ご無沙汰しております」

「それは此方のセリフだな…。まあ、それをご愛嬌にしないか？
互いに“進化途上の繁忙期”とね」

「フツ…、そう仰って頂けると助かります」

女将が四つ指を立てた一礼で席を外すと、どちらともなく冗談交じ
りに挨拶を交わす社長と後藤氏。席を立て名刺交換をすべきだが、
タイミングを間違えてはならないのでその動向を見守るに留めた私。
何より対照的なスタイルであるけれど、対峙して互いを褒め立て合
う2人のオーラが凄まじい――このまま絵画にも成り得るその出で

立ちに、緊張との入り混じりで息を吞んでしまう。此処でもまた綺麗な社長の横顔に、不要にも鼓動がトクンと高鳴りを告げれば流石に自身を厭された。

まさしく不謹慎極まりない、不実な想いを叱咤したその刹那。和やかに談笑を重ねていた2人の眼が此方へ向けられ、今度は驚きから小さく鼓動が跳ねた。

「東条くん、そちらの女性は何？」

社長の優しいブラウン色の瞳とまったく違う、どこことなく後藤社長の強さを感じさせる視線を一身に浴びて鼓動は早まる。

「ええ、紹介が遅れましたが…秘書の佐々木です」

とうにビジネス・モードの社長は穏やかな表情を見せ、再度チラリと此方を一瞥するけれど。いま向けられたモノすべては、貴方の”秘書”であるがゆえ。だからこそ、彼の足手まといになってはならないのだ。

社会人として身につけた最上の笑みを浮かべ、両社が対峙する方へと粗相なきよう向かう。その間も決して視線を逸らさず、品よく歩を進めるのは当然のこと。

「初めてお目に掛かります——後藤社長、いつも大変お世話になっております。

東条の秘書を務める、佐々木と申します。どうぞ宜しく願います」

秘書としてマスターしたお辞儀を重ねて上体を起こせば、後藤社長の鋭さを孕んだ瞳を捉えた。その眼差しは人を惹きつける何かがあり、そのせいなのか目を逸らせない私。すると切れ長の目を細めた後藤社長から、ククツと僅かに喉を鳴らす音が聞こえた。

「あの…、」

「ああ、失礼だったね、申し訳ない。

それにしても東条くん…、美人秘書が同行とは羨ましい限りだよ。そして佐々木さん——今日は気負わずに楽しんでくれると良いよ」

「あ…、お気遣い頂きましてありがとうございます。

至らない点多々あると存じますが…、何卒お願い申し上げます」

「ハハッ、それだとこちらが緊張するよ」

「えっ、あ、申し訳ありません…」

「また謝るんだね」

かえって非礼ともとれる私の態度さえ、とても軽快に笑い飛ばした後藤社長を前に、秘書としても未熟さから赤面してしまう。だけれど同時に、鋭い眼差しから受けた第一印象とは違って、本当は心根の優しい方なのだと安心させられたのも事実…。

彼に促されて社長とともに席へ戻れば、とても和やかな雰囲気では食がスタートした。窓から臨む日本の古き良き情景やこの場の空気を壊さず、とても絶妙なタイミングで会席料理が順々に運ばれて来る。日本国内でも屈指の有名料亭ともあって、目の前に置かれてゆ

く品はどれもが絶品なものばかり。まさに“見て良し・食べて良し”という素晴らしさであった。

美味しいお料理に舌鼓を打ちながら肝心の商談を重ね、時おり上手く雑談が入り混じる。いつになく心地良い席にも拘わらず、どうやら緊張の色が滲み出ていたのか。そんな私を後藤社長はとても気に掛けて下さり、まるでプライベートのように気さくに話してくれた。

「ところで、佐々木さんはマリンスポーツするの？」

「ええとですね…私、じつは海で泳いだことさえ」

「ええっ、本当!？」

「…はい、その、…運動神経が悪くて泳げないので」

「ハハハッ——それは可愛いらしい」

「えっ、…とんでもない事でございます」

サラッと女性を褒め立てる優しさに驚きつつも、いつしか彼の話術にすっかり魅了されて自然と笑みが零れていた。隣の社長からは絶対に向けては貰えぬその温かさに、ホッと癒された錯覚に陥っていたから。ふと考えてみれば、これほど男性と笑い合えたのはいつ以来だろう…?

「今日は楽しかったよ、東条くん…」

「そう仰って頂けると光栄です。こちらこそ、本当にありがとうございました」

穏やかかつ滞りなく本日の会食を終え、笑顔で談笑する2人の背中を追うように、一步後ろについて歩みを進める私。ジャリ、ジャリと玉砂利でハイヒールが埋もれながらも、会話を妨げないほどに微妙なキヨリを保っていた。

しかしながら、改めてこれほど容姿端麗な人もそうイナイと思う度、自身の普通さが際立つのも致し方ないこと。諦めたように優美な日本庭園を眺めて2人の和やかな姿へと目を向ければ、今日という折衝時間の成功を物語っていた。さしてフォローなど出来なかったけれど…、見る限りで後藤社長のご機嫌を損ねずに終えた気がする。――だというのに…、何となく心がスツキリ出来ないのはなぜなの…？

この矛盾を俄かに抱いたトキこそ既に、未来が暗礁に乗り上げ始めていたというのに。計るべき邪推な思いもまた、秘書という役割がオブラートに包んでいたのだろうか…。

「今日は楽しかったよ。ありがとう」

後藤社長が待機していた自身の専用車の後部座席へ乗り込むと、パワーウィンドウを開けてドア越しに笑顔を向けてくれた。

「また次が楽しみです」

「ああ、本当に。その時は、また佐々木さんも来てくれる？」

「有り難いお言葉に感謝いたします。お邪魔でなければ喜んで…」

「フッ…、君は淑女な子だね」

「とっ、とんでもございません」

後藤社長の褒め殺しは最後まで慣れることが出来ず、だけれど不思議と心が高揚していたのも事実。

「今度は会社まで会いに行こうかな？」

「それはぜひとも歓迎申し上げます。
心よりお待ちしておりますので」

まして“次”を取り付けられたのは、必然的に社長にもプラスとなり得ると思うから。私でも彼の役に立てのだと嬉嬉とした感情から、自然と頬が緩んでしまっていたの。

「それじゃあ、また――」

この言葉と晴れやかな笑顔を置き去りにして、後藤社長を乗せた黒塗りの車が静かに走り出して行く。

サーッと頬を掠める穏やかな風と、走り去ってもなお収まらない何かが、ただ静かに私を取り巻いていた…。

「・・・帰る、」

「あっ、…はい」

無言に付していた社長が突然に言葉を発せば、ビジネスモードから無機質で冷たい口調へと切り替わっていた。さして気にも留めず、その広い背中を向けて歩み始めたから、また悲しい現実が押し寄せてズキズキ胸が痛んだ。

「…蘭、早く行くぞ」

「っ・・・」

ザザッと木々の擦れる音が優しく響き渡る中、ふと掛けられた清涼な声音に思わず息を呑んだ。決して振り返っては貰えないとしても、そのたった一言が心を優しく宥めてくれる。たとえ他人の笑顔や言葉に癒されたとしても、それは一過性のモノに過ぎないのだろう。

「はい…、かしこまりました」

さすがに広がり過ぎていたキョリを、少しでも早く埋めたくて、再び玉砂利を踏み締めて歩み始めた。どうしてみても諦められない実らぬ想いは、またその強さが増していくだけとしても構わないと…。

誘引の、始まり。 1

社長へのみだりな感情が募ってゆくとしても、このカンケイに進展がないと承知しているから。

まさに八方塞がりな状況に甘んじている日々に、すべてを断ち切れれば楽だと思いつながら。彼の傍から離れられずにいるのは、水平線のような状況が最良の幸せと分かっているため…。

すなわちこのカンケイに、何らかの動きが生じたそのトキ——本当の意味での“別離”を迎える。

…どこまでも不条理で満ちた世の中に、ささやかな願いが通じる訳がなかった。きっと神様は何処までもイタズラ好きなのだと嫌疑してしまいたい。

「・・・え？」

ある日の穏やかな暮れの頃——社長室に鳴り響いた一本の電話。それが平穏な日々に突然の終止符を告げる、苦しいプレリユードであったと誰が想像出来る？…ただ、これも必然であったのかもしれないね。

感情に忠実でいた頃には、二度と戻れないと知らしめるには十分であつたから…。

「佐々木さん、こんにちは」

受話器越しでも爽やかさを感じさせる、穏やかな低い声色がスツと耳に入って来た。

「後藤社長！大変お世話になっております。先日はお世話になり…」

商談のため先方へ向かった社長が不在の中、突然すぎた後藤社長からの電話。驚きながらも、先日のお食のお礼を伝えるのが先決と口にすれば。

「いや、堅苦しい挨拶は良いから。」

お礼ならこの前、充分すぎるほどされたよ」

「え、と…、」

「フツ、気にしないで」

それをサラリと易く制されてしまうものだから、未熟さゆえの対応の不手際が露呈するばかりだ。

一流企業の社長秘書を名乗っておきながら、これでは力不足もイイトコロ——どうして何時も上手く立ち回れないのか、と恥ずかしさで言葉に詰まってしまった。

「…申し訳ございません」

溜め息を吐きだす代わりに、か細い声で出たのもじつに在り来たりな謝罪。何処までも不甲斐ナイ自分の些細なミスは、ともすれば社長の顔に泥を塗るようなもの。なおさら彼に無能だと、厭きられる材料が増すばかり…。取り巻く感情の苦しさで受話器をキュツと握

り締めれば、クツクツと笑う声が耳に届いた。

「ホントに分かりやすいね」

「え、と、あの…」

後藤社長のさす意味を計りかねて、切り返しベタを晒したために一層笑われてしまう出来ない自分。

「ああ大丈夫、佐々木さんは“優秀な秘書”だよ。

東条君と“同業”の立場として保障する——むしろ、君に秘書にな
って欲しいよ」

何もそこまで口にしたくなるほど、女性を優しくフォローしてく
れる彼。あまりの持ち上げ様に、今度は恥ずかしさで頬が紅潮して
いた。

「落ち込む必要なんか無いよ」

「あ、ありがとうございます…」

電話越しだというのに頭の良さからか、重ねて宥めて下さった後藤
社長。負の感情に包まれた私を上昇気流へと誘導する気遣いには、
感謝の念を抱かずにはいられない——もしも社長ならば怒りもみせ
ず、一切のことに素知らぬ顔を通すに違いない。干渉されるよりも
ずっと辛い、無反応という仕打ちに苛まれることだろう…。

愛しい人のトップシークレットを知っている私にはもう、一生向け
られることのナイ温かさね……

「…佐々木さん、聞いてた？」

「えっ？あ、申し訳ございません！」

ぼんやり社長のことを考えていると、不意に呼び掛けられた鋭い声音によってハッと覚醒する有り様だ。

「ああ、気にしないで良いよ——それで、今日の夜は予定ある？」

「大変恐れ入りますが本日、社長は…」

「いや、東条君じゃないよ。君の予定をお伺いしたんだけどな」

「え、えと——わ…たくし、でしょうか？」

予想外の発言で先ほど以上に驚いた私は、しどろもどろに尋ね返してしまったものの。“うん、そうだよ”と言って軽く笑った後藤社長の声音は、どこことなく楽しそうにも聞こえた。

「それで、返事の方は？」

「え、と…」

「この時間に内勤なら、今日はもう外出はないよね？」

「…ええ、仰るとおりです」

言い淀んでいるとすかさず突いて来るから、さすが秘書を使う立場

の方と思わされた…。社長の同行には別の役員が伴っており、今日の私は溜まっていたデスクワークを片していたのだ。

「それなら食事でもどう？——今日は2人で」

「え・・・？」

「ハハッ、その反応だと嫌がられているね」

「い、いえ：！しかしながら、その：」

失礼を働いたと必死で弁明を考えたものの言葉が紡げず、電話では無意味に等しい頭を振ってしまふ。

後藤社長は古くから社長と親交のあられる方でいて、お取引先にも名を連ねる大企業のトップである。社会に出て間もない、いわばペーペーの新人がご機嫌を損ねるなどあり得ない。そう思うほど、上手い交わし方を持たない自身に、秘書の位置づけをひどく力不足と痛感するのだ…。

「もしかして誤解した？——俺は別に邪な感情で誘った訳じゃないよ。

単純にね、佐々木さんともっと深く話したいと思ってね：ダメかな？」

「：いえ、そんな」

上手い断りも言い訳も出来ずにいたところ、残念そうな声音が受話器を通して届いた。そう受けてしまっでは、本当にこれ以上何かを

紡げなくなってしまった。

「それなら今夜19時に——本当は迎えに行きたいところだが…、途中の代官山駅で待ち合わせようか？

君の慎ましかな性格だと、間違いなく約束まで遠慮されるだろうしね」

「…お気遣い、ありがとうございます」

「それじゃあ、」

いつかの会食と同じ終わり口で通話が途切れた途端、ツーと無機質な終話音が虚しく木霊していた。この優しくも強引な人物からの誘引を発端とし、不穏なカルテットが始まっていたとも知らずに…。

誘引の、始まり。 2

何事にも体の良い理由をつけ、ひたすら本心を隠しているだけというのに。この不条理な世の中のせいに仕立てていたのは、一体いつからだろう…。

たとえ社長にとって、抱き人形やモノであっても構わない。この先も変わらず、懐かしい笑顔を向けられなくても仕方ない。辛くても、悲しくても、苦しくても、心に大きな痛みを覚えても…それでも、ずっと愛しい社長の傍で居続けたいと思っていた。

何よりも愛おしいそのヒトから“イラナイ”と言われる、その日まではずっと…そう思っていたけれど。まさか自身でその道を絶つ日が、これほど早く訪れるとはまったく予想出来なかったの――

後藤社長のお誘いの電話を受けてから1時間経つと、打算的な考えで易々とお会いしてはダメだと考え始めていた。

とても気さくな方であるのは確かだけれど…、高々1時間ほど信用するのともいかななものかと。何より、なおも社長が不在の中で報告せずに後藤社長と会うのは許されないだろう。

うっかり社長のプライベートを話すヘマは冒さないとしても、何かしら不手際があれば――それが東条グループの損失になりかねない。たとえ私が無能な若輩者であっても、社長秘書を名乗る者に迂闊な行動は許されないもの…。

「…やっぱり、断ろう」

重い溜め息を吐き出して受話器を持つと、先ほどメモを取った紙を見ながらダイヤルしてゆく。それは後藤社長のプライベート携帯電話番号である。“今日はほぼフリーだから、困った事があれば遠慮なく電話して？”と、お教え下さったものであった。

その11桁の番号を押し終えれば、プルル…と無機質なコール音が鳴り始めた。4コールほどで切り替わった声音は、どこことなく弾んでいるから緊張感がグッと押し寄せる。

「あ、あの…佐々木です。いつもお世話になっております…」

「——こちらこそ。どうしたの？」

プライベートでビジネス口調は不要と言わんばかりに、柔らかな後藤社長の声音が申し訳なさを余計に募らせていく。それでも気後れしていられず、気合を入れようと受話器を持つ手にグッと力を込めた。

「あ、あの、ですね…その、大変申し訳ございませんが…。

折角お誘い頂いたのですが…本日、社長の許可が取れませんので…」

「ハハ、社長の許可か——佐々木さんは、本当に律儀なんだね」

「と、とんでもございません！…ただ、やはり」

「いや、真面目だと思うよ…非常にね」

軽快な笑い声にフルフル頭を振って否定を重ねるものの、本当は“行きたくない”と口に出来ずにいた。

遠回しに言えば業を煮やされるし、かと言ってハッキリ拒否を示すのも失礼にあたる——社会人としても男性経験の希薄な点においても、どちらが正しいなんて分かる訳もなかったの。

「申し訳ございません…、本当に、」

「どういう意味で、かな？」

「あ、の…、申し訳」

「フツ、そんなに謝られると、こちらが悪いことをしたみたいだよ。食事の件は今日はいいよ…、——真面目な佐々木さんだし、秘書の責務を優先させないかね。

但し…、謝ることがクセになっているね？それは双方に良くないと思うな…」

「あ、あの、すみませ」

「まーた謝って来る！」

「…ええと、」

ひとつ覚えのように反芻するばかりの私を制し、もう気にしないようにと諭してくれた後藤社長。その気遣い溢れた指摘に言葉は見つからず、情けなさから受話器をキュツと握り締めるのみ。

愉快そうに笑う彼に隠れていたためか…、言葉の節々にある警告サインレンの音は全く聞こえなかった――

一頻りからかいを受けた後、“まあ電話で良いか”と諦めたような声音を響かせた後藤社長。何の話だろうと首を捻った私はまさに呑気で、すべてが浅薄であったと後悔の抱く外ない。

「君は東条家…いや、東条拓海に弄ばれていて良いのか？
身勝手な契約で君を縛りつけ、自分の思うがままに扱って…最低だな」

「・・・え？」

不意に登場した社長の名前は元より、後藤社長の発言なのかと我が耳を窺ってしまった。なぜなら彼が言ったものはすべて、私と社長の2人の秘密であるからだ。
漏れ出た声音の頼りなさはもちろん――上手く繕いの言葉が生まれなかった時点で、電話越しの後藤社長はきつとほくそ笑んだことだろう…。

「電話で話す事じゃないが…仕方ない――どうか不義理を許して欲しい。

初めて佐々木さんに会って、年甲斐もなく君に一目惚れしたんだ…――電話では伝わらないだろうがね。

ただね、この歳になれば当然、結婚を見据えた交際を申し込みたい。しかしながら、申し込むにも少々面倒が被って来るんだ。

仕方ないことだけど…家の事情が絡んでくるのも事実でね…。そこで勝手で申し訳ないけど、君について色々調べさせて貰ったよ。――まあ、このトップシークレットには驚かされたがね」

彼の告白など付属品のように感じるほど、受け入れ難いラストの言葉が強烈なまでに脳内を占有してゆく…。一笑しながらも淡々と述べる後藤社長の声色の不気味さに、とても考えは読み取れる筈もなかったの。

返す言葉も見当たらない沈黙の中、パラパラと受話器越しに届く紙を捲るような不快音がひどく耳障りで、…もしかすると調査報告書の類いを見ているのかもしれない。

――それがまた徐々に平常心を奪う物として、異様なまでに恐怖心を掻き立てていた…。

誘引の、始まり。 3

不快音によって心を蝕まれる感覚が付き纏うから、早く通話を終えてしまいたいの。秘書という役割がそれはダメと、自身の行動を強く抑制していた。

ただ固唾を吞んで後藤社長の言葉を待つことが、どれほど辛いものか決して知りたくなくとも…。

「佐々木さん聞ってる？」

「…は、い」

「ムリヤリ抱かれる気分はどう？」

「っ…」

決してムリヤリではなく、同意の上の行為とは言えない。何より、なぜ後藤社長が知っているの？——狼狽によってゴクリと息を吞めば、背中をツーと冷たい筋汗が流れゆく気がした。さらには受話器を通じてククツと喉を鳴らす音が届き、恐怖心で一層のこと苛まれてしまう。

「東条くんは、キミをストレスの捌け口にしか捉えていない——もしくは、ただの性欲の捌け口。」

普段の行動で一目瞭然だと思う。それを君だって、本当は気づいて苦しんでいるよね？」

いつしか被害者へすり替わっていた私——まるで気持ちを代弁しているかのような口ぶりに対し、“それは全く違う・デタラメ”だと必死で頭を振る外ない。

事実に対して酷い言われ様の社長をどうにか擁護したいというのに、何故か言葉を上手く紡ぎ出せなくて。目の前の視界が暗転した錯覚に陥り、クラクラと眩暈を起こしそうになる。

「キミが辛い目に遭っているのに、もう黙ってみていられない……。俺は姑息なやり口は最も忌み嫌っているし、女性を苦しませる最低な男と違って阿漕ではないからね」

矢継ぎ早に発せられた社長への罵詈雑言に触れ、吐息しか出ない代わりにボロツと一気に溢れた涙が悔しさを募らせる。

すぐに頬を濡らした大粒の涙が、止め処なく流れてゆく中で。なぜ私は否定も反論も出来ずに、言葉を詰まらせているのかと自身を愚弄したけれど。その密かな反逆心さえ、最後のフレーズによって脆くも崩れ去ってしまったね…。

「彼にはれっきとした婚約者がいるというのに、」

躊躇いなど微塵も見せずに吐き捨てた、後藤社長の優雅でいて残酷な嘲笑に、打ちのめされていたのだから——

ずっとずっと恐れて来た“婚約者”の言葉に、ガツンと強力なハンマーで殴られたかのような衝撃が走った。もはや決壊していた涙腺は留まるところを知らず、信じたくない現実を涙で濡らすほどである。

「やっぱり知らなかったのか——佐々木さんはこれ以上、時間を無駄に過ごしていいのか？」

好き勝手に弄ばれた拳句、無駄な想いまで抱えるだけ」

「——どっ、して…？」

そんな…コト言わっ、る…筋合いな…っ」

ようやく紡ぎ出せた拙い思いは、あまりに必死すぎて仕事など蚊帳の外の愚かなもの。感情を封じ込めることを忘れ、まさに壊れかけのロボットと化していた。——だけれど、ソレはすべて社長を愛しているがゆえ。

たとえ酷く扱われようが、報われないと分かっている。どうしようも出来ないし、どうしても諦められないほど、拓海のコトが好きだから…。コドモな私なりに様々な覚悟を決め、必死でその拙い道を歩んで来ていたのだ。

「ど、うして…っ」

だからこそ今の“無駄な時間”という一言だけは、相手が誰であってもどうしても許せなかった。

報われない想いと分かっているからこそ、社長としての拓海を受け入れようとしている。まして抱かれているトキも然り、私にとって彼は彼を感じられる唯一の幸せなヒトトキであった。たとえ結ばれないと分かっているにしても…、この想いだけは誰にも侵せないものだと思うから。

涙と嗚咽が言い切ってしまいたいこの感情を邪魔するため、齒痒さが募ってさらに言葉に詰まっていた。

「どうして？——それは君が好きだからと言っただろ？」

そんな私を硬直させるほどの強い物言いが響き、それ以降は声を振り絞る気力さえ失われてゆく。

“好き”なんて拓海から貰える訳もなく、まして私が愛しい人へ伝えられないかのフレーズ。だからこそ、途轍もなく重みのあるその言葉を他の誰からも聞きたくなかった。

「キミの未来が奪われているのを、俺が黙ってみていられる訳ない」

「ち、が…っ」

「違う？——それなら何故、抱かれるだけの関係に堕ちたんだ？」

易く畳み掛けつつ慰めるようなその声色は、私をゆっくり絶望へと導くものに過ぎなくて。最後の抗いと言わんばかりに頭を振り続けている。それが電話越しの後藤社長に伝わる筈もなく、さらなる虚しさだけが包んでいた。

「ここまで言うのも躊躇われるけどね——
いいかい？彼が態度を豹変させたのは、妾めかけの立場を弁えさせるためだよ」

それをあっさり汲み取っていたのか、最後の最後で齎されたフレーズでとうとう屈してしまふ。僅かな願いと希望も断ち切るほど威力は甚大だった。

一緒に過ごせた時間も、大切な思い出も立ち消えるほど。この数分間、すべてを色褪せさせたね——

拓海にとって私は、妾の位置づけと弁えていたつもりだった。陽の射さぬ、日陰の女とも分かっていた筈なのに、他人に言われると胸が痛くて仕方ない。この状況下でポロポロ零れる涙を拭ってくれるヒトが居ないことが、それを肯定していると気づかされる。

「君が純粹に愛して来た最低な男は、そう遠くないうちにあっさり君を捨てて婚約者と結婚する。

人ひとりの人生をこれほど振り回しておきながら、それに構わず自分はそのうと幸せになるつもりだ。

果たしてその現実を受け入れて、結婚した男の隣で幸せに生きていけると思うのか？

もう止めた方が良い——大丈夫、今後は俺が佐々木さんを幸せにしたい……。離れるべきではないかな？」

後藤社長の言葉の数々は私にとってあまりに惨く、それでも反論出来ないほどの強硬さが表れていた。

ふとした瞬間に思い起してしまう、あの優しかった笑顔と意志の強いブラウン色の眼差し。抱かれた時に感じられた素肌の温もりに、熱く降り注いだ激しいキス。いつでも颯爽としている彼から漂う、ホワイトムスクの香り――社長に通ずるそのどれもが愛しくて、それらに縋って想いを募らせていた。

一世一代と言っても過言でなかった筈の“拓海の傍を離れない”という決意も。日々の中で襲って来る、苦しみの中で見つけていた僅かな幸せも。どうしてか今は、それを確かなモノとは言えなくなっていた。

この先ずっと“愛している”と、口には出来ない私の急所を見事に突いた後藤社長に、あと何を言うべきか到底分からなかったの…。

「但し…、未だ強引に攻めるつもりは無いよ？俺は彼と違って、あくまで“キミの意思”を尊重したい。

付け加えるなら…キミの未来を閉ざしているヤツの傍にしようが、先には何も残されていないよ…」

最後のヒト押しには当然反論する突破口など見当たらず、重苦しい状況のまま通話が途切れてしまった。

社長は婚約者と結婚する――悪魔の声から逃れた直後に手からスルリと受話器が抜け落ち、精気を失ったようにペタリと床へ座り込ん

でいた。

頬を伝って止まらない、苦しみに満ちた涙が心の拠り所を失わせてゆく。これでもう捨てられる…、未来は残されてイナイ…、その言葉が脳内を駆け巡っていた。――“イラナイ”と言われる日が、すぐそこまで迫っていたとも知らずに、幸せだと思っていた自分を悔いるばかり。

これは必然だったの…？――ずっと思い違いをして来た、“過去の”への戒め？それとも未だに想いを抱き続ける、“現在の”私への仏罰？

だから貴方は、婚約者という“最後の砦”を隠していたの？最大にして最強ともいえる、一番惨い仕打ちを用意していたほど、私の存在は疎ましかったのかな…？

「うう…、た、くみい…」

従者が主君に対して何かを求めて乞うなど、ご法度であることは分かっているけれど。もうムリ、頑張るのも限界なの――何も見えナイ、疑心暗鬼の状態から逃げ出してしまいたい…。

シンと静まり返った孤独な空間で、誰にも気づかれることのない泣き声が虚しく響いていた。先ほどの自身に問うた答えも、自分のあるべき居場所も一切見つけられずに…。

紅涙の、始まり。 1

あれほど契約に絶望した日から、どれほど身体を重ねても無意味に思えて辛かった。すべての感情を押し殺して拙い演技に集中しては、あまりに離れすぎたキョリを感じて、それがまた苦しくて堪らなかった。

そうだったはずなのに：これからは、ソレすら味わえなくなってしまう。これが意味するものは、ただひとつ――愛おいしいヒトとの本当の別離である。

私のちっぽけな人生すべてが、拓海との思い出に埋め尽くされており、いつも光を纏って進んでいた彼の背中を追って、ひたすら真っ直ぐに生きて来たに過ぎない。だからこそ、後藤社長の言葉で過去と未来そのすべてが脆くも、ガラガラと大きな音を立てて崩れていくの。

あまりに突然岐路に立たされた私は、果たしてどうすれば良いのか分からない。――それを“婚約者”の居る愛おいしいヒトに、妾が頼るなど甚だしいことは私でも分かる。

但し、一度抱いてしまった負の思いは拭い去れなくて。今後は演技派と信じ込んだ、ただの人形としてはとても傍にイラレナイ。着々と自身の願いとは別方向へ向かう時に逆らい、ありったけの本音を晒してしまえたらと思うのに：、それさえ儘ならないから手厳しいものだね。

街並みをあたたく彩り、その鈍い光に照らされた賑わしい夜道を、軽快に走行を重ねてゆく一台のメルセデス。無能と言われる私が唯一、任務を遂行出来ていると思うのは、社長と帰宅する同行業務だ。これがさらに他の女性社員からの反感を買っている、と分かっている。仕事と言えるのは、さながら秘書という特権であろう。

——それを幸せと感じていたのは、今日の朝までのこと。絶望に近い感情を味わった直後に、こうして隣り合うのは酷な時間だから。

あれから社長が帰社するまでに、泣きじゃくりながらも必死で仕事を理由に涙を止めて。化粧室で様々なツールを駆使し、どうにかメイクでカバーした。多少濃さが気になったものの、帰社した彼に泣いたことを悟られまいと、終始ウソの笑顔を振りまいていた。

そうして今日の業務を終えて些かホッとし、社長と共に乗り込んだこの車がまた心を打ちのめしたのだ。

発表会が好評だとかかの経済誌で目にしていた、最新モデルの言わずと知れた海外メーカーの高級車。

上品で落ち着いた優美なフォルムは、どう見てもスポーツカータイプではナイ。まして社長のコレクションのラインナップを考えれば、これはあまりに異質なものである。そしてパールの効いたホワイト色もまた、初めてのチョイスと気づけば悲しみしか生まれない。

これらが相乗して繋がった答えは、この車は婚約者さんの趣味で求めた品ということ——…

隣に位置しても唯一、許されてきた助手席は密かに幸せな空間であったのだけれど。婚約者という存在を知らされた今は、この場所がひどく居た堪れなく思えてならない。

ぬか悦びに浸っていただけの妾の私が、婚約者さんが本来沈むべき席を穢していただけであつたから…。

“不毛な想いを抱えるだけ時間のムダ”という、後藤社長の辛辣に感じたこの言葉も。少しだけ冷静さを取り戻した今なら、正しいのではないかと考えられるようになった。

…たとえ、いずれ枯れ果てるだけの想いとしても、根こそぎ断ち切らねばならぬ現実に耐えるべく、膝上に置いていた両手をさらに強く握って俯くしかない。

ずっとずっと…、ただ好きと想えば十分だったはず。まして拓海の傍にある、恵まれた環境を幸せに感じていた。――それを何時から私は微かな望みを頼りにし、浅はかな希望を抱いてしまったのだろうか？

隣からふわりと甘く漂うホワイトムスクの香りさえ、今日は苦しみを増しゆく材料でしかない。まして愛おしい社長の横顔も窺えないでいる。

他人の揶揄で崩れかけの私が今後、婚約者と幸せそうにする社長の傍らで居続けられるのかと自問すれば。契約としても節々で感じた安らぎさえ、少しずつ色褪せていくばかり。…即ちこれは口籠るコトさえ、限界であるという心の叫びであつた。

「…しゃっ、社長」

「何か？」

「あ、あの…」

勢い余って呼び掛ければ、やけに冷たく響いた貴方の声色に怯みそうだったけれど譲れない。…今日が最後だから、と閉口しかける弱気な自身の心を叱咤する。

「こ、婚約者がみえるというのは、ほ…本当でしょうか？」

その結果——あまりに震えた頼りない声色が、車内に虚しく溶けてしまった。それでもオブラートに包まず、核心に迫れた点は勇気を振り絞ったといえよう。

これほどまで必死な理由はもちろん、後藤社長の発言の真相が分からないから。他人ではなく、率直に本人からの言葉が欲しかったのだ。

震える手が緊張のほどを表す臆病な心は一心に、愛おしいヒトに婚約者がイナイことだけを祈っていた。

「どこで、その話を聞いたんだ？」

「えっ…と、その、人づてです」

「そうか——」

探りを入れる風でもない落ち着いた声音で、私の動揺など構わずに尋ね返して来た社長。何かを納得したように言葉を止めるから、こちらの心臓の鼓動はバクバク煩くて堪らない。

運転に神経を注ぐ社長は、相変わらず正面を見据えたまま。横から捉えることの出来たブラウンの瞳の色に、何の曇りもなく実に爽やかなものである。——とうにその時点で、答えはハッキリ出ていたとは気づけなかった。

「確かに、婚約者はいる」

密かに恐れて来た“イラナイ”と紡がれるまでのカウントダウン。

それは知らないトコロで、とうに始ま

っていたと気づいた。

欲しくなかった肯定を受け取った瞬間——この先の未来は虚しい色へと変わっていたの…。

紅涙の、始まり。 2

聞き入れたくなかった“婚約者がいる”という事実には、心臓の鼓動はバクバクと忙しないものへと変化していた。

やはり小さな願いは所詮、叶わぬ夢なのだと分かったと同時に。彼にとって私の存在価値は、ストレスの捌け口に過ぎないと知らしめてくれた。

それは呆気ないほど無機質に、社長の発した一言が今まで築いて来たすべてを打ち砕いてしまったのだ。

愛おしいヒトに存在する、婚約者さんの姿を想像すればするほど。安らぎであった日々の幸せも遠ざかり、ジワリジワリ目の前が真っ暗に包まれてゆく。まさに茫然自失ともいえる状況に陥り、刺激された涙腺の緩みを辛うじて堪えていた。――今にも流れそうな涙の行き先など、何処にもナイのだから…。

彼の顔さえ見られずに目を伏せていれば、沈黙を切り裂くような小さな溜め息にも似た吐息が聞こえた。

「…まあ良い――何処から聞いたのかは…今は聞かないことにしよう。

但し、蘭は誰に何を聞かれても“一切知らない”と、必ず押し通すように」

「…ハイ、かしこまり、ました、」

こちらに指示を出した社長の声色は、あまりに淡々とした虚しいもので。さらなる現実の儚さに心はポキンと音を立てて折れそう。涙声さえ窺わず言葉を紡げたのは、契約を果たさねばならないという義務感から。それが弱音に萎れた心をただ繋ぎ止めていたの…。

「この話は以上だ——」

「…かしこまりました、」

最後の了承は震えたような声音を響かせてしまったが、どうやら彼にはソレさえ気づかれなかったよう。

今となっては、ただの秘書の疑問に答えてくれた社長に感謝すべきであろう。ただの妾に縋れる余地も権利も、始めから寸分も残されていない半端な立場なもの。…どれほど貴方を一心に想っていても、貴方のすべては婚約者さんへ向けられるばかり。

こうして自身の立場を痛感出来た今日こそが、本来受け入れるべきであった現実なのでしょう…？

ずっと幼馴染みとして傍に居させてくれた、愛おしい貴方と正式な別離をする日はすぐそこだと——

こうして会話の途切れた車内はひっそり静まり返り、重苦しい空気を浄化させるようなBGMだけが無機質に流れていた。愛しい人へ向けた甘い歌詞のラブ・バラードが、惨めな私を早く退かすものに聞こえてならないね…。

＊ ＊ ＊

すっかり夜の闇に落ちた街並みとは対照的に、颯爽かつ軽快な走りをみせた車は東条家のガレージへと静かに到着した。

息苦しさで心の痛みに苛まれていた私は衝動的に助手席のドアを開け放ち、すぐさま車外へ出てしまう。ここは婚約者さんの席――そう思えばずっと革張りシートに深く座れず、まして社長との距離を少しでも分かとうと必死であったのだ。

社長が婚約者のために購入したメルセデスだから。その大切なヒトが納まるべき席を、妾の女が穢して良い訳ない。ここに香りも髪の毛にしても、私の痕跡を絶対に残してはならないと…。

ルブタンのパンプスでアスファルトに足をつけば、ようやく逃げられると安堵の気持ち広がった。それと同時に、あれほど我慢して来た涙腺の崩壊が近づいたのを察知する。

ボタンとドアを閉めてキー・ロックを掛けた社長の元へ慌てて向かい、顔を見られるより早く頭を下げるのが賢明だとかく平身低頭に努めた。…いま私の顔は間違いなく、様々なモノで打ち砕かれた情けない表情に違いないからだ。

「そ、それでは社長、お疲れ様でした。：わ、私はこれで失礼いたします」

時おり震えてはいたものの、どうにか押し切ってすべての形式的フリーズを言いきれた。今日だけは無能な自分を褒めたいほど、頭を上げてからムリヤリながら笑顔を浮かべられたもの。

早く去らなければとそのまま彼に背を向け、ズラリと外車群の並ぶガレージから先に去ろうとするが、コツコツ鳴り響くヒールを今日とはもどかしく感じられた。

「蘭、待つんだ――」

走り去れずにヤキモキしていた私を呼び止めたのは、ひどく落ち着いたテノール調の声色。逃げたいと焦っているのに易く制してしまうのだ。そして泣く寸前であろうが、秘書という身もまた社長の彼に従わざるを得ない理由なのだろう…。

「な…、何ででしょうか」

しかしながら、今日は彼の爽やかな声色に振り返らないで居た。婚約者の事実打ちひしがれていながら、これ以上の衝撃を受け止める気力がなかったせい。――どれほど望んでも欲しい言葉を貰えず、今後はさらなる苦しみが襲うと分かってしまったから…。

「なぜ此方を見ない？」

「…いえ、」

「まあいい、」

秘書として失礼を働く私の態度に、すぐさま咎めたものの。やはり考えていたとおり、小さく溜め息を吐いて“どうでも良い”ことと処理されてしまう。結局、私は周囲の言う“妾”なのだと実感せざるを得ないのだ…。

「――蘭」

「…は、はい」

「さっきの話だが…いいか？誰に何を聞いたとしても、蘭は何も変わらない」

「…っ、」

「話は以上だ、…引き止めて悪かった、」

そうして背中へ届けられた愛おしいヒトの言葉が、あまりにひどく聞こえたのは。紛れもなく私が、契約の關係に私的感情を多分に籠めていたせいだろう。

返事もせず無言に徹する私にお詫びを入れる必要もナイというのに、彼のテノール・ボイスは夜の冷たい闇へと溶けていた。その直後に

コツコツとアスファルトを一定に蹴る音が響き、それがどんどん遠ざかって行くのが分かった。――置いて行かないで、と抱きつけたのならどれほど良いか…。

奥歯を噛み締めて、暗く染まった空を見上げながら私も東条家をあとにする。次第にぼやけてゆく真っ黒な視界が、行き場のナイ未来を表すようだったね…。

紅涙の、始まり。 3

離れたくないと思いつながら歩を進めてゆけば、現実を受け入れるコトが成長への第一歩だと、いつかに聞いた言葉が蘇えっていた。

誰よりも愛おしいヒトから齎された、“お前は変わらない”という酷な言葉――それは寸分の期待を悉く打ち砕いた挙句、私の眼前の道を寸断したに過ぎない。

これでも初めから、すべての意味を承知していたはずだった。社長に仕えるコマ使いとして側に置かれ、自分の立場に少なからず満足していたのに。

どうして私は心底で幼き頃の優しさを振り切れず、愚かすぎる希望を抱き続けていたのだろうか？

ポロポロと止め処なく零れゆく涙を、とても止められない。まして泣いて母の待つ家へと帰れる訳もなく、すっかり夜に包まれた閑静な住宅街を独り歩いていた。

此処は巷でセレブ街として挙がる高級地区であり、東条家と佐々木家の絆をさらに確固たるモノへと築き上げた地でもある。

今となつてはその由縁ですら、ますます逃げようのナイ関係に縛られる材料に感じて苦しいだけだね…。

悲しみで包まれた陳腐な考えが脳裏を過ぎる中、行き場のナイ私の足が自然と向かっていた先——ソレは地区内に存在する、どこにでも存在するような小さな公園であった。

遊具と砂場のみの何ら変哲のない場であっても、私にとっては幼い頃に拓海と遊んだ思い出の残る、とても大切な場所であるせい。

子供はおろか誰ひとりとしていない、シンと静まり返った公園へ足を踏み入れ、鈍い光の街灯に照らされた2人掛けのベンチへ腰を下ろした。

その刹那、どうにもならないほど息苦しさが襲って来て、さらに大粒へと変化した涙に頬が呆気なく濡れてゆく。……それはキラキラと幾重にも輝きを放っていた、眩い星空を一瞬で遮蔽させるほどに——

『蘭、辛くなったら空を見上げて欲しいんだ——計り知れない雄大な空の移り変わりを眺めていると……、自分の悩みがもの凄く小さくことに感じられない？』

色々な顔を見せていても決して変わらない、この空がいつでも励ましてくれる気がするんだ——』

「……ひっ、く、ひっ、」

あれは私立の中学受験を控えた前日の夕暮れ時——不安に包まれていた私を、此処へ誘ってそう教えてくれたトキの言葉。

未だに一言一句忘れられナイでいる言の葉が、プレッシャーを感じる毎日をずっと支えてくれる活力源だった。

譬え想いが報われなくても、虚しさが取り巻いていても。あの日に愛おしい貴方が励ましてくれたとおりに、変わらない空の景色がいつも私を迎えてくれた。

「う…、たく…み…い」

ボロボロ零れ落ちる涙によって前も見れず、この受け入れ難い現実から今はもう逃げたくて堪らない。

あれほど頑張っていたのに…、この空を見上げられる力が今日あっさり失われてしまったの。

どれだけ願おうとも手に入らない、幼心に生じた愛しき思い——ソレを今日まで捨てきれず、微かな期待を頼りに懸けていたから…。

ただ独りベンチで虚しく泣き始めてから一体、どれほど時間が経ったのだろう？——そう徐々に平常心を取り戻せば、現実から逃がすまいと街灯の光が事実を助長する。

こうしている間にも、無常にもトキは刻まれゆくけれど、私の大切な時間が進むコトは二度とナイだろう。

私の心のトキを止めた拓海以外に、再び秒針を動かせるヒトは絶対に現れるわけがナイもの——

不安定に揺れる視界で夜空を仰ぎ見れば、無数に煌めく星屑と鈍く

光る三日月のコントラストを捉えた。

…自分なりに頑張っていたけれど、散らばるように自らキラキラと輝く恒星には近づけなかったね。この先に待つ未来は、出口の見えないブラックホールかな？――どのみち貴方の傍にイラレナイ人生なんて、もうどうでも良いもの…。

「…バイバイっ、」

頬を伝いゆく無数の涙とともに、必死に搾り出した声で紡いだのは、本当の意味での彼との“サヨウナラ”であった。

想いを詰め込んで来たパンドラの箱は、永遠に開けることのナイよう施錠をすれば。あとは片路を絶った私に残されている、明日の见えない道へと静かに進むのみ…。

固執の、始まり。 1

“幼馴染みじゃない”という、アノ日に齎された言葉の意味をようやく理解出来たから。

“お前は変わらない”のだと、私にはもう行き場がナイこともつよく自覚を持てたから。

もっと早く、現実を受け入れるべきだったと思うけれど。大人になった今、ようやく諦めがついたの——今日限りを以って、貴方へ抱き続けたこのキモチは心の奥底へ封印すると…。

その瞬間から未来はナイけれど、過去があるから大丈夫。希望も期待も持てない明日でも、思い出があれば大丈夫。

温かくも幸せで懐かしいトキに縋れるのなら…、ソレだけで今後を生き抜けるハズだからもう大丈夫。…ですから、大切なトキへ密かに想いを馳せるくらいは、ほんの時おり許して下さいね？

「あの、佐々木と申しますが…」

泣きながらも仰ぎ見上げた、満天の星空に誓いを立てた夜——そして最後の“仕事”になると思うけれど、何の悔いもなく進んで行きたい。これが貴方との“別離”であっても、秘書の立場としても本望だもの…。

ずっとずっと愛し続けて来たヒトが幸せになれるのならば。不変に愛し続けて来た日々を、何らかのカタチで証明出来るのならば。――妾の立場で納得した日々、少なからず意味を齎してくれるハズと思えるから……。

「佐々木さんから連絡をくれて嬉しかったよ」

「――いえ、……その、お話がありました」

大抵の女性ならば見惚れるであろう極上の笑顔を前に、何故か震えてしまう手を膝上でギュッと握り締めていた私。

「先日頂きました、お電話の件ですが……」

どうにか振り絞って紡いだせいか、とても頼りない声音が室内で響いたものの。こうして対峙しているのは、アノ日の会食以来に顔を合わせる後藤社長だった。

電話を入れたことにより、彼の提案を受けた私は高級レストランで待ち合わせをして今に至っている。

VIP専用の個室で2人きりのせいか、はたまた向けられている彼の眼光が鋭いせいか。……心の奥底では、此処へ来てまで躊躇しているのか。――この先をどう話せば良いのか、鼓動の早さが治まりを見せない。

「もちろん、良い返事だね？」

「…っ、」

クスクスと軽快に笑う彼の確信をついた発言にビクリとし、鋭ささえ感じる眼差しをとて直視出来ない。

ソムリエにお勧めされた赤ワインの入ったグラスを傾ける後藤社長は、たじろぐ私の考えさえ悟っている気さえするから。その堂々とした風格が、さらにジワリジワリと追い詰めてゆく――

「あの・・・」

「ん？」

「…その、」

ここで引けない、と思いながらも上手く言葉を紡げず口惜しい…。さらに口角をキュツと上げた、精悍な表情を捉えたせいだろう。

どう足掻こうが、残された道は此処しかナイ。何より演技だって、もう慣れているハズでしょう？――ソレなのに今の自分は、そのどれもが消化出来ずにいる。

無意味でしかナイ希望は、昨日の夜空へ置き去りにしたハズなのに。…本当に最後の最後で、どこまでも自身のズルさが先行する地団駄を踏みたい。

「——まあ俺の方は、今日は嬉しい結果を想像しながら来たんだけどね。

キミがこちらへ連絡をくれた時点で、もう進むべき道を決めていた——どう？間違っていないと思うけど」

「っ・・・」

優雅に赤ワインを嗜んでいた後藤社長がそのグラスを置くと、賢者としての片鱗を見せつつ指摘するものだからクツと息を呑んだ。

「俺が幸せにするから、心配しないで身を預ければ良い」

すっかり迷路で八方ふさがり状態の私をゴールへ導くかのように、穏やかな口調と緩めた表情は優しいものに映る。だけれどその心象と同じくし、チラリと強硬姿勢が覗いたのも事実。

「どうかした？」

「い、いえ」

これ以上は視線を泳がせられないと不自然に俯けば、愛おしいヒトの残像がふと浮かび上がってしまう。

どうしても忘れられない、拓海のぬくもりに縋りたい……。だけれど、ずっと大好きな彼の隣にイラレナイ事実が、胸をキュツと締めつけ

た。――寧ろ臆病な自らの心に、“逃げるな”と喝を入れるためだったのかもしれないね…。

「さて、佐々木さんの返事を聞かせてくれるかな？」

「…はい…、よ、宜しくお願い…いたします、」

仕切り直しと言わんばかりの最終通告に、ようやく震えながらも踏み出した一步――誰より愛おしい貴方を守るために、これが正しい道と思えたのに…。自らの口で紡ぎ出した言葉にすぐ後悔が走り、苦しさと悲しみが込み上げる矛盾に苛まれてしまった。

本当ならば、“変わらないで” 傍に居続けたかった。契約としても、抱かれるトキはとても幸せだった。…だけれど、願えば願うほど非現実へと遠ざかるばかりだもの。

「それを聞いて安心したよ」

未だに彼の目を見れないでいる私を咎めることなく、満足気な声色を放ったあとワイングラスを煽る後藤社長がただ怖い…。

逃げ場のない個室ルームで俯いていれば、席を立った彼が向かい側からこちらへと徐に歩み寄って来た。

焦点の定まらない中で、これはある種の職業病だろうか？釣られて

立ち上がった私の身体は、ギュッと強引に彼の胸へ弾むように収められ、その先でふわりとベルガモットの香りが鼻腔を掠めた。

つよく抱き締めるこの腕の力も、とても逃れられない胸の広さも厚みだってそう。今感じるもの何もかもが、まるで拓海とチガウ…。

「蘭…、これからはもう何も考えなくていい。俺は絶対に裏切らない。蘭だけを愛して、かならず守るところで固く誓うから——いつか…あ、もちろんゆっくりで良いが——蘭から、“本当に”好きって貰えるようにね、」

この立場にありながらも、彼からは優しい言葉を掛けて貰えているというのに。その温情でさえ、何ひとつ心をあたためられないと悟った。鼓膜を揺らす低音域の声は、今後の希望をガラガラ崩すに過ぎないと…。

だけれど、現実はとても容赦ないのだと実感する。…こうして後藤社長に触れられることに、拓海と比べるコトさえ無くなるのかな？

「…あ、…愛して、ます、」

「——蘭？」

「後藤社長のことが、…好き、です」

“いきなり何だ？”と言わんばかりの呼び掛けを無視して重ねるのは、この状況にお似合いと思われるフレーズだった。

一歩先すら見い出せない、虚しい未来はイラナイ——現実を呑んだ今こそ、偽りの言葉を吐き出さなければならぬの…。

固執の、始まり。 2

非力な私なりの方法で貴方を守れるとするのなら、今後はソレを生きる糧にすれば良いだけ…。拭い切れぬ想いを抱きつつ、ただのウソ吐きロボットと化すのも易いコト。

「…愛して、ます」

意とそぐわぬ人物に抱き締められている状況下で、私はひどく落ち着いた声音を響かせながらそう紡ぐ。

伝えられなかったフレーズは虚しい塊として宙へ舞い、ことさら貴方への想いの色が濃さを増す。だとしても、後悔に打ちひしがれたりなどシナイ。

この選択もきつと、また違った愛のカタチよね？——だからこそ、この世の誰より愛おしい社長には、婚約者さんと幸せになって欲しいと思う。

愛する人と結ばれるほど、私にとっては難しいものはナイから——今ある幸福を大切にして下さい、と強く願うばかりなの…。

これで拓海と本当の“さようなら”だと自らの心を律することに、

わがままな本音は抗いに顔を覗かせる。どれほど反旗を翻そうにも、これが最善の方法だったから……。そう言い聞かせると、抱き留めて離さない広い胸へとそつと身を寄せた。

「フツ・・・」

すると、嘲るような声がはるか頭上で静かに響き、その冷たい微笑にビクツと肩を揺らす。遠慮気味に上方を窺えば、とても考えの読めない鋭い眼差しが向けられていた。

「いいか？ 今後は見え透いたウソを吐くのは止めてくれ」

「・・・っ」

シンと静まり返った室内はさらに音響効果を高め、身の竦むほどの低音ボイスが浅はかな私をまた追い詰めた。

「反論出来ないなら、凶星と捉えるしかないな…。
そもそも“ウソが最も人を傷つける”コトは、蘭が最も理解してたよね？」

決して逸らせぬ瞳と抑揚なき鋭い口調は、在り処さえ失わせるほどの威力を持ち合わせているから。やり手として評判の後藤社長には、全てすりガラスの如く見抜かれているらしい。

彼の傍で何か画策するだけムダと、今さら気づく私はつくづく救われない女だ。反論に値する言葉も見つからず、やたらと密着した中

で俯く外ない。すると幾許かして両肩へと手を置かれ、ゆっくり彼との間に距離が生まれた。

「いいか…、不要な嘘は二度と口にしないでくれ」

「ハイ…、申し訳ありませんでした、」

引き上げた顔は至極、情けないものだっただろう。それでも瞬時に変化したニヒルな笑みさえ、今は恐ろしい存在であり、頷きながらそう告げることで精一杯の私。

こちらを真っ直ぐ見据え、ジッと捉えるその鋭い眼差しが。今後の未来をブラックホールへと誘うように映ったせいで…。

「ハハッ、そんなに気難しい顔は止めて欲しい」

重さの孕んだ空気をアッサリと断ち切ったのは、ここでも軽快に笑い飛ばした後藤社長——未だ肩に置かれる手に些か嫌悪感を覚えつつ、そうとは言えない立場が悲しみを連れて来る。

「まあ、そんな蘭が好きで結婚を申し込んだし、もちろん気は長く持つけどね？」

とはいえ、後藤家は我慢の苦手な人種だ——こうして承諾を貰えた以上、結婚は早急に進めたいと思う。

これから忙しくなるな…その為に一刻も早く、先ず“東条君”だけには報告をしないと——」

気遣いを見せつつも実は、自身の良き方へと押し進めている後藤社長らしい発言——それはすなわち、もう逃げ道は残されていない証でもあった。

「…っ、そうですね」

とても動揺を隠せないのは、未来への虚しさだけでない。最後の最後で東条社長の名を出され、やはり顔が引き攣っていた私。

何時までも不器用すぎる自分に、ほとほと嫌気がさすけれど。いま対峙する後藤社長の言葉を今後、何ひとつ信じたくもない。ずっと続くハズだった幸せな道を突然に閉ざされ、その人を信用出来るほどの寛大さは持ち合わせていないから…。

もしも二者択一であったならば、迷わず私も愛おしいヒトの傍に居続けられる、至難の道を選んでいたことだろう。

そこに身を置けば、婚約者と結ばれるという現実直面する。幸せに満ちた表情を目の当たりにする度、きつと身も心も引き裂かれるコトがあると思う。それでも、愛しい貴方と一生離れるこの苦痛に比べれば…、想いを募らせるだけの日々に僅かな幸せがあると思うもの。

だけれど、すべてはアノ日に呆気ナイ終焉を迎えていた——拓海が“変わらない”と紡いだ言葉は、臆病だった私を性急に突き動かしただけ。突然に用意されたもうひとつの道は既に、愛するヒトと分

かつ方を絶っていたのだから。

その後藤社長から与えられた猶予は、選択権ナシで私をどんどん追い込み、迷うほどさらに不利な状況を作った過ぎなくて。そもそも社長と私の“カンケイ”を質された時点で、すべてが遅すぎたのだと今なら分かる——出合いは偶然であっても、今後のシナリオを全て握られているのだから…。

幸か不幸か分からないものの、今日は休日である。社長とはアノ夜の一件以来、顔を合わせていない。

もしも平日であれば、今日もまた変わらぬ日常を迎えていたハズ。愛おしい社長との契約もまた、淡々と続いていたのかもしれないね…。

妾である私にいと也容易く、秘密の婚約者さんの存在を明かした彼は拔かりなく、何も問題はナイのだから。——なんて。…どうして私はここへ来てもなお、無意味な仮定を繰り返すのだろうか？

この選択しかない中で、拓海とは会わずに済んで良かったというのに。きっと今の心境で彼の顔を見れば、間違いなく弱さから決心が鈍るもの。

ただ目の前に迫った問題からズルズルと都合よく逃げ回って、絶対に拓海と別離するコトが出来ないわ——

婚約者の存在を知ったことで茫然自失に近い状況で、さらなる追い討ちを掛けられたコトがある。今だってソレを思い出す度、あまりの卑劣さに身震いしてしまうほどだ…。

“それと、もうひとつ付け加えておくけど——俺は“最低な彼”とは違って、キミの意思を優先するつもりだ。

まあ、ただ…返答次第によっては、色々と厄介な事態に陥るかもね”
相手の出方を窺って姑息な手段に講じようとする人が、拓海のことを“最低”呼ばわりする権利はナイ。
ソレでも次々と襲いかかる現実はあまりに惨く、自身の非力な立場も相俟って、私はただ恐怖心に駆られていたの。

“——さて、これでどうする？”

最後に付け加えられた言葉に、到底なにも堪えられる筈がなく。愛
おいしい貴方への想いはそこで、プツリと寸断された音だけが聞こえた…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4878t/>

続きは、社長室で。【1】

2011年9月24日06時33分発行